東医大誌　**68**(2)：167-191, 2010

医　学　史

高橋琢也と学生達（疾風怒涛の物語）(3)

友　田　燁　夫

Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

【要約】　東京医科大学の源流は大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学した学生達と彼らを支援した高橋琢也らの応援者達のドラマチックな話に遡る。また、校歌に歌われている源流2つとは、学生達と順天堂の方々らの応援者を示唆する。本稿はこの2つの源流の中にあって強靭な精神力でもって東京医学講習所の開設、東京医学専門学校の設立を成し遂げた高橋琢也と学生達の暖かい交流の話を記述する。とくに本稿では、大正5年9月11日の東京医学講習所開設より、大正6年春までの東京医学専門学校設立に向けた高橋琢也と学生達の苦闘について述べる。

目次

1. はじめに……1ページ
2. 東京医学講習所における学生達の状況……3ページ
3. 高橋琢也の東京医学専門学校委員長就任の経緯と協賛員署名活動……6ページ
4. 長委三美の協賛員依頼活動……12ページ
5. 秋虎太郎主幹の辞任と高橋琢也の東京医学専門学校設立に向けた活動……15ページ

1. はじめに

大正5（1916）年9月11日に東京医学講習所の開所式が牛込区神楽坂の東京物理学校（現・東京理科大学）を借りて行われた。式には日本医学専門学校を同年5月16日に総退学した学生達四百余名と、学生達の支援者である高橋琢也、福本誠、大角桂厳、秋虎太郎と佐藤達次郎らが参加した。この時点で秋虎太郎は東京医学講習所主幹および東京医学専門学校設立委員長となり、東京医学専門学校の設立のための出資予定者となった。東京医学講習所の設立は高橋琢也の周到な支援がなければ到底なしえなかった。しかし、高橋琢也は東京医学専門学校設立委員の一人として活動し、あくまで秋虎太郎の後方支援に専念した。大角桂厳はのちに東京医学専門学校の理事となるが、目立った活動は行なっていない。福本誠も同様である。

佐藤達次郎は昭和18年に順天堂医学専門学校（現・順天堂大学）の設立のために順天堂医院に戻るまでの28年間、東京医学講習所における教務の責任者および東京医学専門学校校長として、高橋琢也と二人三脚で東京医学専門学校の設立とその発展に尽力することとなった。その後編纂された順天堂史[1]（写真1）の中で、日頃は寡黙であった佐藤達次郎は晩年に大正5年当時を回想して次のように述べている。

「現在の東京医科大学は、もと東京医学専門学校で、現在の日本医科大学の前身の日本医学専門学校の学生が、大正七、八年ごろに［実際は大正五年の出来事］ストライキをして学校にわずか二、三人しかのこらなかったとき、このストライキをした学生の保護者で高橋琢也とい

平成22年2月23日受付、平成22年3月4日受理
（別冊請求先：〒160-8402　東京都新宿区新宿6-1-1　東京医科大学生化学講座　友田　燁夫）

写真1　順天堂史（順天堂大学刊）と東京医科大学五十年史の表紙

う人がこのほとんどの学生のために創立したのがこの前身東京医専である。高橋氏は山林局長、沖縄県知事、代議士［原三郎氏によると衆議員議員をしたことはないという］などをし、最後に貴族院議員にもなった人であった。かれが自分の持ち物を全部売りはらい、書画などすべて手放し、他からも寄付をあおいで設立するということになった。これについては自分は学校の経営をするから教育のほうを担当してほしいといわれた。私はいったん断ったが先代の佐藤進のもとに［学生たちが］承諾を求めに行った（筆者註：大正5年6月5日頃）。当時先代は霞ヶ浦の麻生の別荘におり、高橋氏他二、三人の説得でとうとう承知した。先代にすすめられて私も決心し、教育面のみを担当することを受諾し、ここにいよいよ発足のはこびとなった。」

この佐藤達次郎の言には東京医学専門学校設立までの経緯が要約されている。とくに下線部分に述べられているように、佐藤進（順天堂医院第三代当主）は高橋琢也の説得によって学生達の救済に乗り出すこととなった（前稿[2]に詳述）。この言葉からは高橋琢也と佐藤進の親しい関係や高橋琢也の学生達の救済への決意などが読み取れる。また、「佐藤進を説得した二、三の人」とは実は石黒忠悳（いしぐろ・ただのり）男爵、高橋是清（たかはし・これきよ）男爵、三宅秀（みやけ・ひいず）博士であった（本部会記録[3]）。高橋琢也はこれらの人達に佐藤進の説得をも依頼したと考えられる。佐藤進、高橋琢也、石黒忠悳、高橋是清、三宅秀らは江戸開成学校出身者であり、我国の近代化のために重要な役割を果たした先達である。これら5名の方々は強い信頼関係で結ばれていたが、数十年後の大正5年に東京医学講習所設立、東京医学専門学校の認可に向けて再結集することとなったのは不思議な縁としかいいようがない。いずれにせよ6月中旬の佐藤進の学生達の救済のための出馬は、大正5年6月2日以降の高橋琢也の誠実な支援がなければありえなかった。高橋琢也は学生達の紛擾が一旦収まった8月か9月に、秋虎太郎が新医学校の設立資金を提供しその責任者になるという熱意を知り、側面からの応援を続けることとなった。

東京物理学校内の東京医学講習所はあくまで日本医学専門学校より総退学した医学生達の緊急避難の場所であり、新しい校舎の建築が急がれた。また、文部省は東京医学講習所を正式に医学専門学校としては認定していなかったため、ここでの習得単位は仮のものであり、学生達には医師国家試験を受ける資格は保証されていなかった。学生達はあくまで支持者達によって新医学校の建物が建築され、財団の確立がなされ、それらが文部省によって認可されるであろうという前提で勉学を続けるしかなかった。それ故、時間の経過とともに、経済的にも精神的にも不安定な状況が学生達に増幅されていった。

一方、秋虎太郎は東京医学講習所の主幹（兼東京医学専門学校設立委員長）となったものの、新たに医学校を設立するには余りにも非力であり、かつ資金的にも困難であった。何故なら、秋虎太郎は四万円（現在の4億円程度）の自己資金で新医学校を設立する予定であったが、文部省が新しい医学校を認可するには三十万円（現在の30億円相当）以上必要であることが判明したからである。大正5年11月には秋虎太郎は寺尾亨、福本誠、大角桂厳らと相談のうえ、東京医学専門学校設立委員長の職責を高橋琢也に委譲してしまう。さらにその年の暮に秋は病床に伏し、東京医学講習所主幹の辞任の意向を固めた。秋虎太郎は翌大正6年2月になって東京医学講習所主幹を正式に辞任し、経営責任をも高橋琢也に移譲してしまった。高橋琢也は9月11日以降は東京医学専門学校設立委員として協賛員の募集に没頭していたものの経営に立ち入る考えはなかった。そのため、12月の秋虎太郎の辞任は学生達や高橋琢也にとって思いがけない困難な事態となってしまった。

また、大正5年当時、我国では既に徴兵制が布かれていたが、同年5月16日に日本医学専門学校を総退学した学生達には、大正6年3月31日（厳密

には大正5年5月16日）までは前の学校で認められていた兵役義務免除（=学徒免除）が一応有効であった。しかし学籍がなくなる大正6年4月以降はそれが消滅し、兵役義務が新たに生ずるという問題があった。そこで医学生達は他の大学などに二重登録して徴兵を免れようとした。いわゆる学生達の兵役忌避行動である。大正6年秋頃より7年3月にかけて、マスコミはこの学生達の徴兵忌避の実態を喧伝し、また憲兵隊も調査に乗り出したことから、この問題は東京医学講習所に学ぶ学生達や高橋琢也らを苦しめることとなった。

これに対して、文部省は日本医学専門学校を総退学し東京医学講習所に学ぶ学生達への処遇は勿論、日本医学専門学校に残された学生達の保護や日本医学専門学校の経営の危機的状況に対しても苦慮していた。大正6年の秋の立教大学の医学部開設活動（実際は大正5年秋より進行しつつあった）は文部省にとって願ってもない話として急浮上した。立教大学（当時は専門学校令による大学。初代学長：元田作之進、大正8年に築地より池袋に移転）はアメリカ人ウィリアムズによって既に設立（明治40年）されていたが、そこに巨額の費用を要する医学科をつくるという構想は文部省にとって渡りに舟となった。文部省は東京医学講習所の学生達と、学生紛争により経営が行き詰まった日本医学専門学校の学生達を立教大学医学科に収容するということで、問題を一気に解決しようと図った。

文部省はこの時期、全国の専門学校と大学の制度の全面的な見直しと制度改革を行なおうとしていた。それまでは明治10年に設立された帝国大学（のち東京帝国大学）やその後設立された4つの帝国大学しか大学として認可されていなかった。40年余りを経た大正7年に岡田良平文部大臣のもとで初めて「大学令」が施行され、官公私立の大学が認可されるようになった。それ故、岡田文部大臣が担当した大正5年10月より大正7年9月までの期間は我国の教育の大変革期となったのである[4]。立教大学医学科設立構想はこの文部省の策定に沿ったものであった。また、当時の文部省の教育諮問機関である臨時教育会議の有力メンバーの一人が日本医学専門学校理事長・山根正次であったこと[4]も現在からみると東京医学専門学校の承認には大きな障害となっていたと考えられる。大正6年初めに高橋琢也が秋虎太郎より東京医学講習所主幹を引継いだのち、文部省の高官、とくに専門学校局長・松浦鎮二郎（まつうら・しげじろう）が東京医学講習所の専門学校への昇格を中々認可しようとしなかったのは以上のような背景があったからである。

このように、東京医学講習所が大正7年4月11日に東京医学専門学校として認定されるまでに高橋琢也と学生達の前には多くの苦難が待ち受けていた。とくに、新医学校設立のための資金調達の問題、敷地買収問題、回生病院買収問題、一部の学生達の苛立ちや脱落、立教大学による買収問題などの問題に加えて徴兵忌避問題が次々と起り、しかも文部省は昇格を渋ったことから、高橋琢也と学生達は翻弄されることとなる。学生達は新たに学生団をつくり、とくに大正6年の秋からは、学生団本部会が指導的立場で学生達の結束を図るとともに、高橋琢也との連絡や交渉、ひいては絵画骨董頒布会への関与、立教大学との合併問題への傾倒、文部省との独自の交渉など、大きな動きを行なうようになっていった（これらの話は次稿に述べる）。

本稿では、大正5年9月11日の東京医学講習所開所より大正6年春までの高橋琢也と学生達の苦闘を中心に、奮闘の半年[5]、高橋琢也日記[6]、長委三美の記録[7]、学生団本部会記録[3]、東京医学専門学校雑誌[8]、東京医科大学五十年史[9]などの記載に基づいて詳述する。

2. 東京医学講習所における学生の状況（大正5年9月11日~10月7日）

大正5年9月11日より10月7日までの東京医学講習所での学生達の状況は断片的ながら、奮闘の半年[5]に記載されている。本章ではそれらを抜粋し、説明を加える。

九月十一日（月）　晴　風烈

午前八時より東京医学講習所大講堂に於て始業式行わる。半年ぶりに制服制帽靴踏みならして参列する者の喜色見ずや。

午前八時半より東京医学講習所始業式開始

一．式辞　角先生

一．経過報告　秋先生

一．教務に関して　佐藤達次郎先生

一．祝辞　高橋先生

一．同　福本先生

一．答辞　中本富太郎

午後一時より向島サッポロビール会社庭園に

於て懇親会を開催す。この日風強くして隅田川は白沫を飛ばして逆波を寄せ、小蒸気の翻弄せらるる様なかなかに壮観なりき。見よ、かの小舟こそ、過去の我等が運命に如何に似たるかを。然して今日のよろこびの更に深きよ。東医学生会懇親会会場の看板をくぐれば、万国旗はハタハタとひるがえり、大天幕の式場を囲んで、模擬店は軒を並べ、池の彼方の小山よりは楽隊の音楽しく響き来る。胸に紅白紫黄とりどりの薔薇の花を付けたる委員のせわしげなる中にも喜色あり。ビール樽は大小幾個となく積み上げられ、焼鳥の香、おでん屋の煙、汁粉、あんころ、すし屋店等已に準備なる。高橋、福本、大角、佐藤達、秋の五先生、清水、その他の教授来賓参集せらる。

潮の様に祝賀歌の合唱が楽隊の音と共に天幕の下より起りぬ。一回に一回、それが拍手に代れば、後藤吉勇君、開会の辞を述べ、次いで高橋、秋、福本、清水御先生の演説あり。各自の心漸次高潮に達せり。小野庄次郎が学生団に対する決死の覚悟と五先生に対する感謝を朴訥なる雄弁を以て述べつつ、男泣きに泣きし時、波津久統重が「僕等は指定も何もいらぬ。以後は真面目に勉強して理想的の学校をつくればよいのだ。」と叫びし時、実に一同は感慨無量、ともに感激の極に達せり。その他、中村丈夫、石川、須藤、三輪、等夫々熱弁を振い、紀念の撮影をなす。

模擬店は一斉に開始され、舞台には少年剣舞、義太夫、浪花節の余興及学生の余興等も、夫々人を誘う。夕暮れ近くなり行くままに、風稍収まりて、雲間には十四日の月、青光をひたし、和楽の観いよいよ大なりき。当時奮戦の勇士互いに手をとり戦いの跡を胸に描きつつ固き握手を涙の中に交し、益々今後堅実なる建設の覚悟を誓い合いぬ。

ああ長月のなか一日　　墨堤花はあらずとも
この歓楽よ月の光よ　　君な忘れぞ永劫に

九月十二日より十四日迄臨時休校

九月十三日（水）雨　秋雨蕭々たる午後四時、山本仁を東京駅頭に送る。

九月十五日（金）曇　各年組級長選挙あり。姓名左の如し。

四年級　級長　安部達人　副級長　多久　俊
三年級　級長　渋川達三郎　副級長　前田燐之助
二年級　級長　柴田万吉　副級長　馬詰嘉吉
一年級　甲組級長　中山幹　副級長　永井正夫
　　乙組級長　江並猛　副級長　高橋進

九月十六日（土）曇　本部会慰労会の議可決せらる。

九月十八日（日）晴　「通告第二」配布さる。

通告第二

拝啓致候陳者、前回申進候通り、新校創設の計画追々進捗致候に就き、左記の地に財団法人東京医学専門学校創立事務所を設置し、医学博士佐藤進及医学博士中濱東一郎の二氏を顧問に推薦し、同時に医学博士佐藤達次郎氏に一切の教務組織を請い同博士提督の下に担任教授、

倫理学　得能文
独逸語　文学士・小宮豊隆
独逸語　道部順
同及化学　竹内作次郎
解剖学　医学博士・井上通夫
解剖学　医学士・工藤喬三
生理学　医学博士・井上達一
医化学　桜木清耳
薬物学　医学博士・清水茂松
細菌学　医学士・古屋芳雄
病理学　医学博士・緒方知三郎
内科学　医学博士・中濱東一郎
内科学　医学士・田沢鐐二
同　　医学士・池上作三
外科学　医学博士・佐藤達次郎
外科学　八代豊雄
同　　医学士・山村正雄
同　　医学士・前田友助
産婦人科学　医学博士・相馬又次郎（未定）
眼科学　医学博士・井上達二
法医学　医学士・浅田一
衛生学　医学士・古屋芳雄
精神病学　医学博士・三宅鉱一
小児科学　医学士・清水茂松
皮膚病学　医学士・栗本定次郎
耳鼻咽喉科　医学博士・千葉真一

を招聘し、本月十一日始業式を挙げ、引続き懇親会を開催致候間、此段御諒承被下度、更に及御通告候也。

大正五年九月十三日

東京医学講習所　　主幹　秋虎太郎

東京医学専門学校創立委員
大角桂厳　高橋琢也　福本誠
寺尾亨　秋虎太郎

追而予て通知致し候通り、本所事務に付ては自今、秋虎太郎主幹として、担当可致候に付、左様御了知相成度候。

この通告第二により秋虎太郎が東京医学講習所の責任者かつ東京医学専門学校設立のための総責任者となった。また、順天堂医院から派遣された医師が臨床各科の担当教授となった。これらの方々は東京医学講習所が東京医学専門学校に昇格したのちも、継続して教授を担当し学生達の教育に当った。このように佐藤進や佐藤達次郎を中心とする順天堂医院から派遣された人達の支援なくしては、東京医学講習所および東京医学専門学校の存続はあり得なかった。東京医科大学の校歌に歌われている「源流二つ」のうち1つは順天堂医院の方々であったことは以上のことから明らかである。

九月十九日（火）　晴　順天堂外科手術室、学生の為に解放せらる。

九月二十二日（金）　晴　級長会議開催

九月二十五日（月）級長会議内容を発表し、可決す。

決議

一．本部学生は自治を精神とし剛健質実なる校風を発揚す可し

二．学生は教務課の権威を尊重す可し

イ．試験問題、試験範囲等に付、絶対に容赦せざること

ロ．試験の採点並に及落に関しては絶対に容赦せざること

ハ．総て情実を許さざること

三．教授の講義並に教授上の事に付、意見ある時は級長に申出づ可し

四．学生にして学業を怠り、或は操行不良なる者あるは級長は級を代表して忠告す

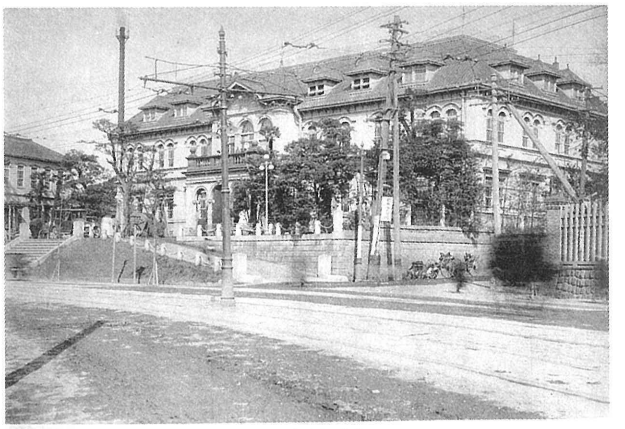
五．級日誌を作製して級長は日々の主なる事項を記入す

下線で示したように、学生達は御茶ノ水の順天堂医院（院長は佐藤進、副院長は佐藤達次郎）（写真2A, B）や麹町の回生病院（中濱東一郎所有）（写真3）で臨床研修を受けるとともに、神楽坂の東京物理学校で化学実習の一部を行っていた（写真4）。当時より質実剛健な校風が形成されつつあった。

十月二日（月）雨　午後一時より一学年教室に於て学生大会を催す。

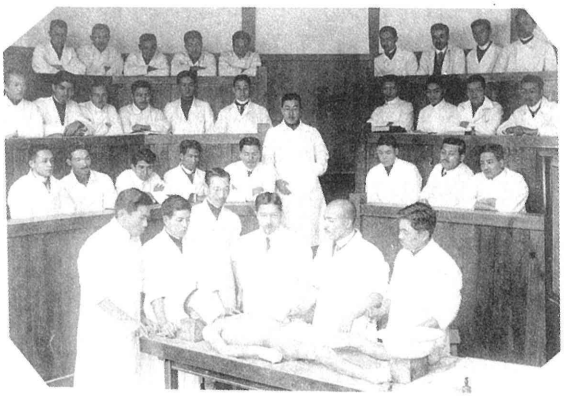
議長　安部　副議長　多久　法律問題に就ては波津久よく説明あり。

十月七日（土）　曇



順天堂病院全景

(A)



外科臨床講義（澤先生）

(B)

写真2　順天堂病院の全景（A）と順天堂病院での外科学講義（B）

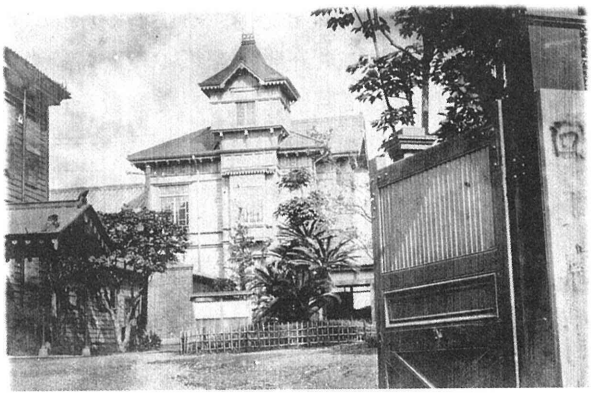


写真3　回生病院（中濱博氏寄贈）

写真4　東京物理学校（現・東京理科大学）における化学実習風景（医学講習所2年生、中央で右向きの白衣の学生は長委三美）

午前八時十分第一の振鈴と共に、学生は講堂に参集。学生会会則の協議あり。四年生安部、会則草稿を朗読し、質問に応じ、多少の修正を加えて可決。各役員の発表も同時に行う。九時散会。秋、高橋、大角、福本諸先生、田沢、清水、池上、道部、諸教授、山本仁君及びその紹介による紐育土地建物株式会社社員・津崎尚武氏等参集。

私立東京医学講習所学生会会則

第一条　本会は東京医学講習所学生会と称す

第二条　本会の事務所を本所内に置く

第三条　本会の目的は自治を精神とし、会員相互の親和を図り、徳操を涵養し、智識を交換し、体力を練り、以って剛健質実なる校風を発揚するにあり

第四条　本会は本所在学生を以て正会員（卒業生を以て特別会員）教授職員を以て名誉会員とす

第五条　本会の事業として左の四部を置く

一．講演部　二．体育部

三．編集部　四．会計部

（中略）

第十七条　本会は毎年一回春季総会及秋期運動会と隔月一回の通常会を開くものとす。但し通常会は時宜により開かざることあるべく、又臨時之を開くことあるべし。

第二十条　本会細則は役員会の決議を以て別に之を定む

付則　本会即は大正五年十月七日より之を施行す

学生会役員（大正五年度）

顧問　大角先生　高橋先生　福本先生

寺尾先生　佐藤達次郎先生

会長　秋先生

副会長　欠員

編集部　医学部長　清水先生

文芸部長　小宮豊隆先生

体育部　部長　前田先生

講演部　部長　田沢先生

会計部　部長　池上先生

このようにして設立された学生会は東京医学講習所が東京医学専門学校に昇格したのちも学友会として継続され、さらに東京医科大学においても医学会と三部会として存続している。なお、大正12年に校歌「ヒポクラテス」の原稿が発見されたのは、この学生会会計係の文箱からであった。

大正5年10月7日をもって、「奮闘の半年」[5]の記録は終りになっている。この後の学生達による記録は大正6年11月1日より記載された本部会記録[2]がある。しかしながら、大正5年10月8日から大正6年10月末までの学生達の記録は残っていない。故原三郎名誉教授は「大正四年十二月十八日より大正五年十月七日までの毎日の記録は上村透、宇津水斌、安部達人、原三郎等が編集して大正五年十二月に発行した奮闘之半年に詳細に記録されている。それから一年間の学生側の記録は現存しない。本部係員は改組して半数以下となり、筆者も新委員に加わった記憶があるが、学生側の会議記録は残っていない。確かにあったので、非常に残念である。しかし高橋先生日記[6]は連日記録したものが残っている。」と述べている。今後、その一年間の学生達の記録の発見が期待される。

以下は、高橋琢也日記[6]とご遺族より提供された長委三美の記録[7]を中心に大正5年10月8日以降の高橋琢也や学生達の活動の経過を述べる。

3. 高橋琢也の東京医学専門学校委員長就任の経緯と協賛員署名活動（大正5年9月11日~12月末）

大正5年9月11日より開設された東京医学講習所の経営は秋虎太郎主幹によってなされるようになった。この間の授業料の徴収や給与や学校維持のための支払いなどはもちろん、早期の東京医学専門学校設立への責任などすべて秋虎太郎の肩にかかっ

ていた。その重圧に秋は次第に消耗していったようである（東京医科大学五十年史）[9]。11 月 8 日になり、秋虎太郎は東京医学専門学校設立委員である寺尾亨、福本誠、大角桂厳と相談の上、共に高橋琢也を訪問し設立委員長を降りることを伝えた。これに対して高橋琢也は学校経営以外の総ての責任を統括することで了解し（11 月 14 日）、学生達や教員達の責任者にその旨を伝えた（11 月 15 日）。その経緯は高橋琢也日記[6] の 11 月 8 日から 11 月 15 日の部分に記載されている。

大正五年十一月八日　寺尾、大角、福本、秋の四氏と富士見軒に会合す。医専の創立委員長となりて財団組織の成立に尽力せん事を四氏より懇請せらる。予は之に対し数日の熟考期間をあたえん事を乞い、四氏之を諒す。

十一月十三日　夕刻、寺尾、福本二氏来訪。□座協議の末、遂に委員長たる事を承諾す。但し予の趣は両氏に於て秋氏に報告する筈。

十一月十四日　山本（達雄）、中濱（東一郎）の二氏を訪い、医専の現況を話し、山本氏協賛員を署名す。福本氏、秋氏に面会して、予の委員長承諾の旨を通し、之に依て拾五日午前十一時富士見軒に会合せん事を福本氏より電話にて申来る。

［山本達夫：前農商務大臣、貴族院議員。中濱東一郎は既に東京医学講習所の顧問であったが、その後辞任している。佐藤達次郎や順天堂病院の医師たちが東京医学講習所の教授となったことが影響していたのでないだろうか。中濱東一郎は大正 6 年の秋には石黒忠悳の仲介により自分が経営する回生病院（のちの博済病院）を高橋琢也に売却するが、協賛員になることはなかった。］

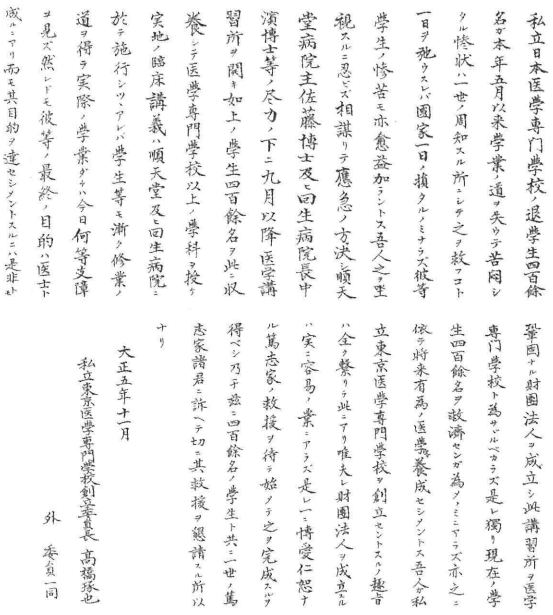
十一月十五日　午前十一時、寺尾、福本、秋の三氏と富士見軒に会合す。秋氏より予が委員長を承諾せし事を謝し、就ては今後医専の財団創立と医専学講習所と教務との三事業に対し委員長となって尽力致し呉れたく、且つこの事を本日医学講習所に於て教員総代及び学生総代に此の旨を通達したき事を述べたり。予並に他の二氏も之を承諾し、午後二時車を連ねて講習所に至り、両総代に向って秋氏より予の三事業の総委員長たる事を告げ、次て予が一同にむかい左の如く演説したり。

今回、寺尾、福本、秋、大角の委員諸君より予が今秋君の述べられたる三事業の委員長たる事を懇請せられ、遂に辞退もせず云わるるままに承諾し、今後一層の努力致する事を御承諾したるは只今秋君の御通告の通りである。元来予は老朽の上に何等地位も学識もなく、予の信用もなき者なれば、この大任を引受けて諸君の御付託に背かざる様の攻果を上る事は最も困難であって、元より今日は何等成竹もない次第なれば、前途の事は何も申上げ様はないが、既に他の四人の委員諸君を是まで通り否一層御尽力有る事、又学生諸君も各々自分の事として将来も全力を尽さるる事と思えば、困難なる事業なればとて成功せざる筈はないと思う。故に予は委員長となると否とに係らず、諸君と共に学校成立に尽力する積りなれば寧ろ諸君の御希望を容れて努力するに然かずと決心志たる次第である。されば今後は委員諸君は勿論、学生諸君にも十二分の御援助下さらん事を願い置く次第である。不肖としては好し今成竹はないにしても、故人の謂う（精心一統何事か成らざらん）精心、誠意奮闘努力を尽したならば或は成竹する成らんと信ず。否飽まで成立せしめねばやまぬ積りである。（金弐百円也、小切手富士見軒に於て秋氏より受領す）

このように、高橋琢也は東京医学専門学校の財団創立と東京医学講習所および東京医学専門学校における教務の総責任者としての委員長を引き受け、秋虎太郎は経営責任者（= 出資者）として専念することとなった。その時に高橋琢也の作成した直筆の創立趣意書が残されているが、時代を超えた高橋琢也のメッセージとなっている（写真 5）。

創立趣意書

私立日本医学専門学校の退学生四百余名が本年五月以来学業の道を失うて苦悶したる惨状は一世の周知する所にして之を救うこと一日を弛うすれば国家一日の損たるのみならず彼等学生の惨苦も亦愈益加らんとす。吾人之を座視するに忍びず相謀りて応急の方を決し順天堂病院主佐藤博士及び回生病院長中濱博士等の尽力の下に九月以降医学講習所を開き如上の学生四百余名を此に収養して医学専門学校以上の学科を授け実地の臨床講義は順天堂及び回生病院に於て施行しつつあれば学生等も漸く修業の道を得て実


創立主意書

私立日本医學專門學校ノ退學生四百餘名ハ本年五月以來學業ヲ通ヲ失ヒテ苦悶シタル悲狀ハ一世ノ周知スル所ニシテ之ヲ救フコト一日ヲ緩クスレバ國家一日ノ損タルヲミナラズ彼等學生ノ悲苦モ亦愈益加ラントス吾人之ヲ坐視スルニ忍ビズ相謀リテ應急ノ方法ヲ順天堂病院主佐藤博士及ビ回生病院長中濱博士等ノ尽力ノ下ニ九月以降医学講習所ヲ開キ如上ノ學生四百餘名ヲ此ニ収養シテ医學專門學校以上ノ學科ヲ授ケ実地ノ臨床講義ハ順天堂及ビ回生病院ニ於テ施行シツヽアレバ學生等モ漸ク修業ノ道ヲ得ヲ実際ノ學業ダケハ今日何等支障ヲ見ズ然レドモ彼等ノ最終ノ目的ハ医士ト成ニアリ而モ其目的ヲ達セシメントスルニハ是非トモ

聖固ナル財団法人ヲ成立シ此講習所ヲ医学專門學校ト為サザルベカラズ是レ獨リ現在ノ學生四百餘名ヲ救濟センガ為メノミニアラズ亦之ニ依テ將来有為ノ医學養成セシメントス吾人私立東京医學專門學校ヲ創立セントスルノ趣旨ハ全ク繫リテ此ニアリ唯夫レ財団法人ヲ成立スルハ実ニ容易ノ業ニアラズ是レ一ニ博愛仁恕ナル篤志家ノ救援ヲ待テ始メテ之ヲ完成スベキ得ベシ乃チ茲ニ四百餘名ノ學生ト共ニ一世ノ篤志家諸君ニ訴ヘテ切ニ其救援ヲ懇請スル所以ナリ

大正五年十一月

私立東京医學專門學校創立委員長　高橋琢也

外　委員一同

写真5　創立趣意書（高橋琢也、直筆）

際の学業だけは今日何等支障を見ず。然れども彼等の最終の目的は医士と成にあり。而も其目的を達せしめんとするには是非とも鞏固なる財団法人を成立し此講習所を医学専門学校と為さざるべからず。是れ独り現在の学生四百余名を救済せんが為めのみにあらず。亦之に依て将来有意の医学生を養成せしめんとす。吾人が私立東京医学専門学校を創立せんとするの趣意は全く繫りて此にあり。

唯夫れ財団法人を成立するは実に容易の業にあらず。是れ一に博愛仁恕なる篤志家の救援を待て始めて之を完成するを得べし。及ち茲に四百余名の学生と共に一世の篤志家諸君に訴えて切に其救援を懇請する所以なり。

大正五年十一月

私立東京医学専門学校創立委員長　高橋琢也

外　委員一同

高橋琢也は翌11月16日から、東京医学講習所設立委員長としてこの趣意書を携え協賛員の募集を精力的に行ない、その年の暮（12月16日）までに167名の協賛者を得た（奮闘の半年）[5]。

高橋琢也日記[6]には毎日の署名活動の状況が詳しく書かれてある。この時期は募金活動は全く行われていないが、高橋琢也の精力的な署名活動は翌年以降の募金活動への大きな布石となっていった。また、高橋琢也は当初からそれを意図していたと考えられる。

大正五年十一月十六日　二人曳にて午前八時外室。橋本圭三郎、中田敬義、長嶋鷲太郎、川島幹、団琢磨（だん・たくま）、中島久万吉、若宮正音の諸士を訪う。中村（丈夫）、波津久（重統）両学生来る。長嶋（鷲太郎）、若宮（正音）、股野琢（またの・たく）の三氏協賛員署名す。

［高橋琢也の年末までの協賛員の署名活動は高橋琢也の人脈の中でも高橋が信頼をおいていた有力な人達から始めている。この人達の協力は翌年の募金活動の大きな伏線となっていった。橋本圭三郎：前農商務次官、宝田石油（のち日本石油）社長。中田敬義：陸奥宗光外務大臣秘書官。長嶋鷲太郎：法学博士、衆議院議員。団琢磨：三井合名会社理事長。中島久万吉：古河電工社長、貴族院議員、男爵。若宮正音：農商務省商工局長。股野琢：帝室博物館館長。中村丈夫は当時の学生団団長であり、しばしば高橋琢也を訪れることとなった。中村丈夫は終生、高橋琢也を実父のように慕った。］

十一月十七日　内務省帝室林野管理局行き、協賛員に南部光臣、和田国次郎、佐々木和策、東久世通俊、塩沢健の諸士署名。

［南部光臣以下、帝室林野管理局関係者。南部光臣：帝室林野管理局長。和田国次郎：帝室林野管理局技師。佐々木和策：帝室林野管理局技師。東久世通俊：伯爵、土方久元伯爵は義兄。塩沢健：帝室林野管理局技師］

十一月十八日　富谷銓太郎に協賛員の事依頼す。

［富谷銓太郎（とみたに・しょうたろう）：法学校で寺尾亨や福本誠、原敬と同級、大審院院長のち明治大学学長。高橋琢也が初期に訪問したことから大きな意味があったと考えられる。］

十一月十九日　長崎省吾、原保太郎の二氏を訪い、協賛員の署名を受け、肝付（兼行を訪う。不在。

［長崎省吾：宮中顧問官－高橋琢也は宮内庁顧問として13年間勤めた。原保太郎：農商務省山林局長、貴族院議員。肝付兼行：海軍中将、貴族院議員、男爵］

十一月二十日　好天気。午前中有吉同道にて外室。池田成彬、藤原銀次郎の署名を受け、有賀（長文）、高崎、藤波子（爵）等を訪う。皆不在。

［池田成彬（いけだ・しげあき）：三井財閥の指導者的人物、日銀総裁。藤原銀次郎：三井物産木材部長をへて王子製紙社長。有賀長文（ありが・ながふみ）：農商務省工務局長のち三井合名会社理事、三井の宮内大臣と呼ばれた。高橋琢也は三井財閥の全面的支援を考えていた。しかし、この当時三井慈善病院設立が水面下で進んでいたため、三井財閥の支援は 1 年後には部分的となった。］

十一月二十一日　午前、高橋是清、高地保三郎。高地の署名を受く。山田直也、奥田義人を訪う。午後伊東子（爵）、渡、加藤（友三郎）海軍大臣を訪う。不在。志村源太郎、柳谷副総裁、水野錬太郎、勝置、岡本英太郎、白沢保美、松波秀実の六氏の署名を受く。留守中医学生来る。

［高橋是清：東京農林学校校長、のち大蔵大臣、総理大臣、高橋琢也と親しかった。高地保三郎：判事。山田直也：三井鉱山重役。伊東已代治：東京日日新聞社長、枢密院議員、子爵。奥田義人：農商務省次官、東京市長、文部大臣。加藤友三郎：広島出身の海軍大臣、のち総理大臣。志村源太郎：東京農林学校教授、日本勧業銀行総裁。柳谷卯三郎：勧業銀行副総裁。水野錬太郎：高橋琢也と親しかった。内務大臣、文部大臣。岡本英太郎：農商務省山林局長。松波秀実：農商務省山林局技師。明治林業逸史の編者］

十一月二十二日　午前中、武井守正、谷森真男、井上角五郎、金子堅太郎の四氏を訪い、協賛員の署名を受く。夜分、中村（丈夫）、長（委三美）の両学生来る。

［武井守正：高橋琢也の上司、農商務省山林局長、貴族院議員。谷森真男：貴族院議員。井上角五郎：長委三美の保証人、実業界の有力者。金子堅太郎：農商務省における高橋琢也の上司、農商務省次官、明治欽定憲法草案作成。］

十一月二十三日　中村元嘉、土井順之助、呉文聴、田村貞馬、堀内慶一の署名を受く。

［中村元嘉：判事。土井順之助：海軍主計官。呉文聴：前統計審査官。田村貞馬：東京の大酪農家、蒸気殺菌牛乳を我国で開発した。］

十一月二十四日　午前、車にて訪問。高島北海、岡田治衛武、岩崎勲、原敬、有賀長文、牧田環、山田直也、田中文蔵の諸氏署名を受く。（高島）北海一日の寄付画を承諾す。渡、加藤（友三郎）、園田の三士を訪う。不在。

［高島北海（得三）：農商務省山林局での高橋琢也の部下、アールヌーボー芸術に影響を与えた高名な日本画家。高橋琢也は高島北海に依頼して日本画家による絵画頒布会を 1 年後の大正 6 年秋より行うが、その下準備に訪問したと考えられる。高橋琢也はこの時点で募金活動を既に想定していた。岡田治衛武：神戸実業家。原敬：政友会総裁のち総理大臣。有賀長文：前出。牧田環：三井鉱山重役。山田直也：三井鉱山重役。田中文蔵：三井物産取締役、三井慈善病院創立者の一人。］

十一月二十五日　早朝、山中隣之助、奥元帥、船越光之丞，馬屋原彰を訪うて署名を受く。芝景川を訪うて寄付画を依頼し、和田維四郎を訪う。不在。学生、長（委三美）、中村丈夫来談。

［山中隣之助：東洋汽船取締役。奥保鞏（おく・やすたか）：海軍元帥。船越光之丞（ふなこし・みつのじょう）：船越衛の子息。馬屋原彰：貴族院議員。芝景川（しば・けいせん）：明治、大正期の有名な日本画家。和田維四郎（わだ・つなしろう）：農商務省鉱山局長をへて八幡製鉄所所長］

十一月二十六日　午前中、土方（久元）、大谷（靖）、村上（敬次郎）、田口（謙吉）の四氏を訪い署名を受く。木村（喬）訪う。不在。来訪、甲賀宣政、署名を受く。清水医学士来談。鈴木半蔵来訪（寄付画運動上、打合せの為め）（寄附金の件）

［土方久元（ひじかた・ひさもと）：土佐藩士、伯爵、日本絵画会会長、高橋琢也と親しかった。大谷靖：済生会病院理事。村上敬次郎：貴族院議員、男爵。田口謙吉：参天製薬創業者。木村喬：農商務省山林局技師。甲賀宣政：造幣局技師］

十一月二十七日　朝八時より冨谷銓太郎、杉浦良春の二氏を訪い、署名を受く。夜に至り中村丈夫来る。

［冨谷銓太郎：前出。杉浦良春：前行政裁判所評定官］

十一月二十八日　午前中、奥田（義人）、中橋（徳五郎）、石黒（忠悳）、豊川（良平）、小柴（保人）、

飯田を訪う。皆不在。講習所を訪う。学生、中村（丈夫）外一名来る。

［中橋徳五郎：農商務省、文部大臣、高橋琢也の親友。石黒忠悳（いしぐろ・ただのり）：前陸軍軍医総監、医学界の実力者、高橋琢也と親しかった。小柴保人：工学博士、高橋琢也の義弟］

十一月二十九日　学生三人来訪

十一月三十日　朝より田中喜代次、木村喬の二氏を訪い、署名を受く。安田、関等を訪う。不在。

十二月一日　肝付（兼行）、中島（久万吉）、中田（敬義）、倉富（勇三郎）の四氏を訪うて署名を受け、高橋、有島を訪う。病気又は不在。

［肝付兼行：前出。中島久万吉：貴族院議員、男爵。中田敬義：前出。倉富勇三郎：帝室会計審査局長のち枢密院議長］

十二月二日　郷（誠之助）、伊藤、田中、加藤を訪う。不在。朝吹（英二）、磯部（正春）の二氏を訪い、署名を受く。小柴（保人）も署名す。鈴木半蔵来談。同人に事務係を託す。村井（吉兵衛）家を訪う。不在。

［郷誠之助：東京取引所理事長、日本運輸社長。朝吹英二：三越創始者。磯部正春：農商務省鉱山局局長］

十二月三日　寺嶋、村井（吉兵衛）、九鬼（隆輝）、股野（琢）、高橋男（爵、是清）、跡見（花渓）等を訪う。高橋男の書名を受く。

［村井吉兵衛：タバコ会社設立者、帝国ホテル取締役。九鬼隆輝：伯爵、播州三田藩藩主子息、神戸財界の有力者。股野琢：帝室博物館総長。高橋是清：東京農林学校校長、大蔵大臣、総理大臣。］

十二月四日　上野精養軒に行き左の人名の署名を受く。和合英太郎、尼子四郎、藤井包総、岡田来吉、小鷹狩元凱、荒川五郎、沖馬吉、早速鎮蔵：衆議院議員。小沢俊夫、下田次郎、植木豊吉、久留只一、壇上新吉

［これらの方々は広島県人会である水曜会の集りに参加していた。和合英太郎：ニチレイ創始者。尼子四郎：芸備医会の責任者。藤井包総：広島藩士、陸軍中将。小鷹狩元凱（おたかり・もとよし）：広島藩士。荒川五郎：衆議院議員。沖馬吉：沖電気創始者。早速鎮蔵：衆議院議員］

十二月五日　原嘉道、佐々木慎四郎、小田良次を訪い、皆署名を受く。夜中中濱（東一郎）を訪い、回生病院ゆづり受けの相談をなす。

［原嘉道：法学博士、佐々木慎四郎：東京海上保険専務。小田良次：札幌五番館デパート創業者。中濱東一郎：回生病院院長、ジョン万次郎子息、森鷗外の同級生、この当時は東京医学講習所顧問。1年後に回生病院を高橋琢也に売却。］

十二月六日　朝六時半横浜向け行く。安藤（謙介）市長、有吉（忠一）知事、安部幸之助、茂木惣兵衛、原富太郎五氏の署名を受く。若尾（璋八）、左右田（喜一郎）、大谷（靖）、平沼（専蔵）を訪う。不在（旅費いろいろ金拾円なり）。

［安藤謙介：横浜市長。有吉忠一：神奈川県知事。安部幸之助：横浜・大安生命保険取締役。茂木惣兵衛：横浜在住の大相場師。原富太郎：横浜在住の生糸貿易商、美術収集家。若尾璋八：東京電燈副社長。左右田喜一郎：左右田銀行創始者。大谷靖：済生会理事長、平沼専蔵：横浜銀行創設者、貴族院議員］

十二月七日　医学生二人。鈴木半蔵、画工依頼の打合をなす。

十二月八日　清水医学士、鈴木半蔵、画工に関する報告の為め来る。

十二月九日　医学生二人宛四組。江木千之を訪い署名を受く。橋本（圭三郎）、安楽（兼道）、小野田、内田（信也か）を訪う。皆不在。

［江木千之（えぎ・かずゆき）：枢密院顧問官、文部大臣。橋本圭三郎（前出）。安楽兼道（警視総監、貴族院議員。内田信也：山下亀次郎、勝田銀次郎とともに三大船成金の一人。］

十二月十日　古市（公威）、佐藤を訪い署名を受く。浅野侯を訪い、種々請願をなす。医学生二人。

［古市公威（ふるいち・きみたけ）：日本近代工学、土木の先駆者、男爵。浅野長勲（あさの・ながこと）侯：広島藩藩主、高橋琢也はともに長州征伐に参加した。］

十二月十一日　後藤（新平）、池田（謙三）、田中（銀之助）を訪い、和田（維四郎）、橋本（圭三郎）、安楽（兼道）、加藤（恒志）、河村（譲三郎）、南（弘）、杉田（定一）、古河（虎之助）の署名を受く。医学生三組五人来る。午後、鈴木半蔵来訪。寄付画の協議をなす。

［後藤新平：台湾総督府責任者、内務大臣、東京市長。池田謙三：第百銀行頭取。田中銀之助：前出。和田維四郎：前出。橋本圭三郎：宝田石油のち日本石油創設者、安楽兼道（前出）。加藤恒志：貴族院議員。河村譲三郎：貴族院議員、前司法次官。南弘：貴族院議員、杉田定一：貴族院議員、古河虎之助：古河財閥総帥］

十二月十二日　由布（公平）、加藤（正義）、大倉（喜八郎）、池田（謙三）、村井（吉兵衛）を訪い、署名を受く。三井の重役、拓殖の関を訪う。学生三人（五十銭車夫に弁当代遣す）

［大倉喜八郎：大倉財閥創始者、男爵。池田謙三：第百銀行頭取。村井吉兵衛：前出］

十二月十三日　午前中、後藤（新平）、加藤（友三郎）海軍大臣、鈴木（貫太郎）、江原（素六）、花房（義質）、小沢武雄、桂（二郎、松平（乗承）を訪い、署名を受く。田中、望月（圭介）、馬越（恭平）を訪う。皆不在。

［加藤友三郎：海軍大臣。鈴木貫太郎：海軍次官のち総理大臣。江原素六：貴族院議員。花房義質：枢密院顧問官、子爵。小沢武雄：貴族院議員、男爵。桂二郎：陸軍次官、太陽生命保険社長。松平乗承：子爵。望月圭介：衆議院議員。馬越恭平：大日本麦酒創設者］

十二月十四日　波多野（敬直）、大森（鐘一）、渡辺（勝三郎）、小沢（武雄）、塚本（清治）、中川（望）をたづね、署名を受く。

［波多野敬直：宮内大臣、子爵。大森鐘一：皇宮太夫、男爵。渡辺勝三郎：地方局長。小沢武雄：貴族院議員、男爵。塚本清治：土木局長。中川望：衛生局長］

十二月十五日　花井（卓三）、秋元（興朝）、箕田（長三郎）を訪い、署名を受く。添田、平田、曽我氏を訪い、不在。医学生、長（委三美）外。夜に至り中村（丈夫）外一人来る。

［花井卓三：広島出身の高名な弁護士。秋元興朝：子爵。箕田長三郎：貿易商］

十二月十六日　久保田、永田、柴田、小川を訪い、署名を受く。松平、加藤、伊藤、波多野（敬直）、米山、岡本（英太郎）を訪い、不在又は病気。

［波多野敬直：前出。岡本英太郎：当時の農商務省山林局長］

「奮闘の半年」[5] には165名の協賛員が大正5年12月16日までを日を追って記載されているが、高橋琢也の協賛員への署名活動はさらに続いた。12月17日より12月末までの記録は次の通りである。

十二月十七日　大橋、近藤、古田、福田、柳、山本、米山、久世通久、黒田、七海の署名を受く。中村外一人来談。小野金六、鈴木梅四郎を訪う。不在。

［小野金六：富士身延鉄道社長。鈴木梅四郎：三井銀行より王子製紙取締役、衆議院議員］

十二月十九日　有松、松岡、山本を訪い署名を受く。勝田（銀次郎）、柳原、吉川、尾崎、野田、飯田、上村、高橋を訪う。留守又は病気。医学生、長（委三美）。夜に至り大角（桂厳）来訪。

［勝田銀次郎：内田信也、山下亀次郎（山下汽船）らとともに、いわゆる三大船成金の一人。］

十二月二十日　宮内省へ行く。徳川（家達）伯、波多野（敬直）、加藤高明、石原、鈴木梅四郎を訪うて署名を受く。三井（合名会社）各部を訪う。磯村を訪う。

［徳川家達伯爵：徳川家第16代当主、加藤高明：大正13年秋より総理大臣、鈴木梅四郎：前出］

十二月二十一日　小野、飯田、渡辺、添田を訪うて署名を受く。豊川、石黒（忠悳）、曽我、西園寺（公望）を訪う。大角（桂厳）より電話来る。すべて不同意。

十二月二十二日　午後より鈴木、岡田、田中、小林、佐藤を訪う（参拾円、鈴木半蔵運動費）。芳川、桜井、加藤、松平（乗承、子爵）、藤波（子爵）の署名を受く。秋虎太郎氏より小切手参百円也来る。夜に至り、中村（丈夫）外一人来る。

十二月二十三日　松平、東園（基光）、日比（翁助）、佐々木（勇之助）、和田豊次氏の署名を受く。午後より医専講習所行く。

［日比翁助（ひび・おうすけ）：三越呉服店会長。和田豊次：富士瓦斯紡績社長、紡績業界の巨頭、貴族院議員］

十二月二十四日　朝より村田一郎、大岡育造、児玉亮太郎、小坂、中西、菅原伝、奥繁三郎、吉原正隆、東園基光、森久保、土居則光、岩本、白井、谷中、井上敬之助、野尻、谷内清太郎、村野、佐藤、池田、横田、政尾、床次、菊池、武満、三上、成田、則本、田中、河野、小林、丸

山豊次郎、佐藤友右衛門、諸氏の署名を受く。

［高橋琢也はこの日、国会に行き、署名活動を行なったと考えられる。村田一郎：冨士製紙社長。大岡育造：衆議院議長、文部大臣。児玉亮太郎：原敬秘書官。菅原伝：衆議院議員。奥繁三郎：衆議院議長。吉原正隆：逓信大臣秘書官。東園基光：貴族院議員。土居則光：貴族院議員。井上敬之助：衆議院議員。谷内清太郎：。丸山豊次郎：貴族院議員。佐藤友右衛門：貴族院議員］

十二月二十五日　清水遼一、井上医専学校経営の事に付き、来談。寄付画募集の事に付き鈴木（半蔵）来談。

十二月二十六日　横田氏を訪い署名を受く。平山、目賀田を訪う。又、恒藤（規隆）、山田、寺崎、山形、鳩山（和夫）諸氏を訪ひ寄付画を依頼す。

十二月二十七日　土方（久元）を訪い顧問を依頼し、快諾せらる。（絹地、尺三、三疋四十円五十銭支払う）

［この頃、中濱東一郎は東京医学講習所顧問を辞任していたと考えられ、後任補充のため土方久元を訪れた。土方久元は高橋琢也と親しかった。］

十二月二十七日　伊藤氏を訪い署名を受く。安部氏を訪い医専の事を依頼す。

十二月二十八日　小森、田中、若尾（璋八）、越山、明渡氏を訪い署名を受く。寺内（正毅）、高島（北海）、大谷（靖）、後藤（新平）を訪う。鈴木半蔵、寄付画の事につき来談。画工十五名の寄付画の謝金を渡す（絹地十五疋買入れ代金支払う。二百四十銭也）

［若尾璋八、高島北海、大谷靖、後藤新平は前出。寺内正毅：大正5年10月より総理大臣］

十二月二十九日　平田、赤羽、安川、友野、中丸、田村（貞馬）諸氏の署名を受く。中沢、星野、荒井、豊川（良平）を訪う。午後四時より富士見軒に会合す。寺尾（亨）氏欠席す（十二円三十銭□や払い）

［田村貞馬：前出。豊川良平：三菱財閥幹部、第百十九銀行頭取］

十二月三十日　団（琢磨）、三井（合名会社）、有賀（長文）、西園寺（公望）、秋元（興朝）、武井（守正）、岡（喜七郎）、浅野家を訪い、飯田の署名を受け、武田、嶋崎を訪い、寄付画を依頼し、鈴木半蔵に寄付画の件に付き来談。医学生来る。大角より（井上の件）電話来る。

［団琢磨、有賀長文、西園寺公望、秋元興朝、武井守正、浅野家は前出。岡喜七郎：衆議院議員。］

高橋琢也は年の瀬に浅野家を訪れている。また、団琢磨や三井本社などの財界有力者や有賀長文、武井守正ら強力な支援者を訪れた。

4. 長委三美の協賛員依頼活動（大正5年9月24日～12月2日）

この年の秋、東京医学講習所第二学年の長委三美も協賛員の依頼のため、高橋琢也の紹介状をもって、数多くの名士を訪問している。学生達の中でも長委三美はとくに高橋琢也の信任が厚かった。長委三美の日記[7]には、訪問した島田三郎、加藤高明、三輪多元道、近藤次繁、石黒忠悳、和田彦次郎、井上角五郎、平山金蔵、斉藤孝治らとの会話が残されている。大正5年9月24日に、長委三美は協賛員への要請に島田三郎衆議院議長を訪れた。

島田三郎議長を私邸に　九月二十四日　協賛員になって頂くこと

「昨日御出で下さったそうであるが、失礼いたしました。其後どうなりましたか。うまく行きましたか。あ、それはいいですね。良くやってくれましたね。教授の方も千葉（真一、耳鼻咽喉科）、井上（達一、生理学）、八代（豊雄、外科）、三宅（鉱一、精神科）、皆良く知っています。達次郎先生も技術にいーし、人格もいいが、何しろ若いので世間は知らぬが、佐藤（進）、森（鷗外）、中濱（東一郎）の顧問はいーですね。佐藤（進）様は学術の上、読書の人で人格の欠点なく、実に私淑して居ます。一人のため四百余名救われることで満足でしょう。まあどうか勉強してその実を挙げられんことを。医は申すまでもなく蘭学により文明を我国に入れた日本の文明の仲介者であるが、人間を肉の如く取り扱ったために非難がありまして、日本医専の問題も起ったのです。そこをよくお考え、有徳の医者となって頂きたい。永い間の困難艱苦を決して忘れないように有効に使って、他日の成功を祈ります。賛成致しましょう。」

その後、高橋琢也の活動により、島田三郎を含めて以下のような著明な衆議院および貴族院議員が協賛

員として加わった。

衆議院議員：原敬、後藤新平、犬養毅、水野練太郎、島田三郎、坂東勘五郎、岡喜七郎、岡崎国輔、小川平吉、大竹貫一、奥野市次郎、小山温、渡辺脩、川原茂助、田川大吉郎、松田源治、古谷久綱、小池靖一、江藤哲蔵、綾部惣兵衛、斉藤珪次、箕浦勝人、広岡宇一郎、望月圭介、関清英

貴族院議員：江原素六、船越光之丞（高橋琢也が頼った船越衛の長男）、杉山四五郎、山本達雄、長嶋鷲太郎、元田肇、秦豊助、馬屋原彰、村上敬次郎、原安太郎、谷森真男、中島久万吉、荒川五郎、岡田来吉、早速鎮蔵、加藤恒志、安楽兼道、河村譲三郎、南弘、古賀廉造、杉田定一、

しかしながら、長委三美が次に訪問した加藤高明（大正13年10月より総理大臣）は日本医専の理事長・山根正次が立憲同志会（加藤高明は党首）に所属していたためであろうか、

「今般、佐藤男爵其の他名士のご尽力の結果、東京医学専門学校設立せらるべき旨、陰乍ら喜んでいる。しかしながら、新規協賛員に加名すべしとの御下命ながら主義として従来かかる種類のご依頼に応じたる先例は無い。」

といって協賛員としての参加を拒んでいる。

さらに、長委三美は石黒忠悳男爵を同級の柴田万吉とともに訪問した。石黒忠悳は大変気位が高く、面会するには大変難しい人物であった。しかし、長委三美は既に石黒忠悳とは懇意の間柄となっていた。石黒忠悳は長々と自説を述べたが協賛員にはならなかった（前稿に詳述）[2]。このような石黒忠悳の打ち解けた様子からは、長く北里柴三郎や高木兼寛らと脚気論争で争い、また生涯にわたって医学界の大立者として活動した人とは思えないほどの素顔がうかがわれ、長委三美の記録[7]は医学史的にも貴重な文献であるといえる。石黒忠悳は表向きは協賛員としては参加しなかったが、次のような東京帝大医学部の教授陣達を協賛者として紹介してくれた。また、森鷗外も石黒忠悳と同調して、協賛者の紹介に尽力した。

医学および大学関係者：入沢達吉（東京帝大・内科学）、石原久（東京帝大・口腔外科）、林春雄（東京帝大・薬理学）、緒方正規（東京帝大・衛生学）、大沢謙二（東京帝大・生理学）、大沢岳太郎（東京帝大・解剖学）、永井潜（東京帝大・生理学）、長井長義（東京帝大・薬学）、三田定則（東京帝大・法医学）、山極勝三郎（東京帝大・病理学）、弘田長（東京帝大・小児科学）、宮本淑（東京帝大・内科）、青山徹蔵（東京帝大・外科学）、小此木信六郎（耳鼻科医、日本医学専門学校教授）、阿久津三郎（順天堂病院・泌尿器科）、佐藤佐（順天堂医院副病院長）、佐野彪太（佐野病院院長、加藤友三郎の女婿）、栗本東明（真泉病院および大森病院院長）、三輪信太郎（医学博士）

大正5年10月12日には、長委三美は柴田万吉とともに和田彦次郎を訪問している。和田彦次郎（衆議院議員）は高橋琢也の同郷の広島出身であり、明治20年代に農商務省において高橋琢也と同僚であった。

貴族院議員（正しくは衆議院議員）、和田彦次郎氏を自邸に。

時に十月十二日午後零時三十分　柴田万吉君同道

「お手紙は拝見しましたが誰が主脳となりやって居られますか。実に諸君にとっては目出度い事か。殊に佐藤（進）様が教授の主人という事は此上なく財産はきっとよるでしょう。然し、金というのは得がたいものですね。財産の方は如何してありますか。分りました。私の如き、元より学なく、智なく、名もないものですが、御邪魔、差し支えなければ御加名下さっても苦しくはありません。実に永い間の苦心でありました。昔の人は苦学したのも随分多いでした。皆人に頼らず独立的やったるので、高橋（琢也）君などよいよ苦学であの地位を勝ち得られたので、又自分としても大いに青年の戒めとして誇りとして居られる様です。あの人も別語学などをやったものではないですが、然し山林局になど居られた時は大いに独てし森林法をとき、時の品川子爵などに愛がられたものです。真汐野に引き、何でも十何年目に、沖縄の県知事された様に承っています。」

このように和田彦次郎は、東京医学講習所の状況について尋ねるとともに、同郷の高橋琢也のこと（下線）を述べている。和田彦次郎は協賛員を快諾した（のち大正7年には東京医学専門学校の評議員となった）。和田彦次郎を始め、高橋琢也の農商務省時代の上司や同僚も協賛員として加わっている。以

下の方々であり、いずれも我国の農林行政の確立に大きな足跡を残した人達である。とくに高橋琢也は明治18年より明治30年まで農商務省山林局にあって、日本の森林制度改革や我国初めての森林法編纂と制定に尽力したことから、農商務省やその他の省庁の官僚には幅広い人脈をもっていた。

農商務省山林局関係者：和田彦次郎（高橋琢也と同郷、農商務省農務局長、衆議院議員）、中橋徳五郎（高橋琢也の親友、農商務省次官）、武井守正（高橋琢也の上司、山林局局長）、金子堅太郎（高橋琢也の上司、農商務省次官）、高島北海（高橋琢也の部下、山林局課長・のち高名な日本画家）、高橋是清（高橋琢也の親友、東京農林学校校長、のち大蔵大臣）、和田維四郎（農商務省鉱山課、のち八幡製鉄所所長）、中村弥六（高橋琢也の好敵手、山林局辞任、のち衆議院議員）、和田国次郎（農商務省、南部光臣（帝室林野庁長官）、岡本英太郎（山林局局長）、松波秀実（「明治林業逸史」の編纂者）、本多静六（東京帝大農学部教授）、田村貞馬（東京の大酪農家）、磯部正春（農商務省書記官）、橋本圭三郎（農商務省次官）、若宮正音（農商務省商工局長のち宝田石油社長）、加藤正義（農商務省権少書記官、のち日本郵船副社長）、志村源太郎（東京農林学校教授、日本勧業銀行総裁）、水野勝興（農商務省官吏、日本勧業銀行役員）、佐々木和策（帝室林野管理局技師）、鹽澤健（帝室林野管理局技師）、白沢伴春（林学博士）、堀内慶一、岩崎動

しかしながら、長委三美が大正5年10月15日に訪れた南大曹（南病院院長）や平山金蔵（駒込病院院長）らは協賛員としての参加を拒んでいる。南大曹は

「協賛員になってくれとの御手紙ですね。然し僕は学校の性質を知らん。又五名の御方を存じません。それにかかることは佐藤様から何かあって然るべきだとぞんじます。そして、二、三日前の雑誌にも順天堂の機関学校（順天堂医院に医学専門学校が設立されたのは昭和18年のことである）との、又老人方は承知だの、若手は反対してるとも聞いた。そして日本医専と東京医療学校の間に、これもあるで考えさしてくれたまえ。然し学生には同情している。そして吾は後援会に入ったと承知していない。そして帝大あたりの先生とことなり開業医は立場に困るからな。」

と述べ、平山金蔵は

「僕は東京医学専門学校の新設のめどついて賛助して呉れとの意であるが、如何なる理由の下に新設されたのか少しも知らん。」

といい、結局賛助員にはなってくれなかった。また、この時期長委三美は斉藤孝治（日本医学専門学校父兄会幹事、東京府会議長）を訪問している。斉藤孝治は大正5年5月16日の学生達の総退学時は学生達を応援していたが、6月になって日本医学専門学校側の父兄会の幹事となっていた。その後は日本医学専門学校の支援をした。秋虎太郎は東京市会議員であり、斉藤孝治は東京府議会議長であったことから、秋虎太郎の辞任には斉藤の関与があったかもしれない。本部会記録[2]には秋虎太郎がのちの大正6年末に日本医学専門学校の出資に関わっていることが記載されている。

東京府会議長　斉藤孝治氏を。神保町の事務所「日本医専の学生が学校に行こうが行くまいが、それは学生の自由にして決して束縛はせぬ考えである。僕等より見ると認可のある学校の方が確かだと思う。なかなか此上困難でありますぞ。我々二十五人の評議員はただ学務の上で財団には関係していません。然し話は磯部氏よりありますが、確とした金も入らず、目下ある慈善団と交渉中であります。柏田学監はよしたのは事実であります。あの人も人格に至っては疑いを始めからして入れてありました。立教大学合併問題もやめとなった様ききます。おっ、これも少々不賛成でした。とに角、金銭については学生に迷惑をかけぬから学校はあくまで勉強した方がいいでしょう。」

斉藤孝治の話からは経営に行き詰まった日本医学専門学校の状況が良く分かる。また、この頃、立教大学と日本医学専門学校との合併話が既にもちあがっていたが、この件は翌年大正6年の秋に大きな問題となって浮上した。一方、長委三美の保証人であった井上角五郎は11月28日、長に対して

「其後如何ですか。どうやら設立出来た様子ですね。此を見るに中々立派な方々揃いで、順天堂、中濱病院のクリニックなら此上ないですね。今度は設備さえ出来れば、認可とか指定とか何でもんないでしょうね。財団の方は出来ました

か。此賛助員などは少しは出しましたか。余り金持ちもないようだが、先日以来私は遊行していませんでした。留守に高橋さん来て下さったそうです。委員長に高橋さんはいいでしょう。よく知れた人で信用もあり、なかなか物をするのに熱心ですからね。今頃、二、三十万位すぐ出来ますよ。何れ近々に又面会していろいろと相談にのりましょう。」

と述べている。井上角五郎の話から、すでにこの時期には設立委員長が秋虎太郎から高橋琢也へと移っていたことが分かる。また、高橋琢也の設立資金の募金活動は大正6年になってからのことである。なお高橋琢也が募った協賛員には実業界からは井上角五郎を始め13名が加わった。

井上角五郎（日本製鋼所創始者）、牧田環（三井鉱山会長、昭和飛行機創始者）、藤原銀次郎（王子製紙創始者）、池田成彬（三井銀行、日銀総裁）、有賀長文（三井合名会社専務理事）、沖馬吉（沖電気創始者）、池田謙三（第一生命保険創始者）、村井吉兵衛（民営たばこ会社設立）、岡田治衛武（神戸実業家）、和合英太郎（ニチレイ創始者）、田口謙吉（参天製薬創始者）、柳谷卯三郎（勧業銀行副総裁）、山田直矢（三井鉱山重役）、山中隣之助（東洋汽船社長）らが名前を連ねている。

これら実業界の方々が協賛員として参加したことは、翌年の高橋琢也の募金活動において有力な支持基盤となったことは明らかである。また、高橋琢也は明治5年より明治18年まで陸軍省翻訳課に在籍していたが、陸軍で同じ広島出身の佐藤正、藤井包総らとは旧知であった。また、海軍の加藤友三郎も広島藩の出身であり、高橋琢也とは藩主浅野長勲（あさの・ながこと）を通して強い繋がりがあった。陸軍および海軍関係者の協賛員は次の通りである。

陸軍：佐藤正（宮中顧問官）、藤井包総（陸軍中将、貴族院議員）、桂二郎（陸軍次官）海軍：中尾雄（海軍少将）、奥保鞏（海軍元帥）、土居順之助（海軍主計官）、肝付兼行（海軍中将、貴族院議員、男爵）、倉富勇三郎（帝室会計審査局長のち枢密院議長）、加藤友三郎（海軍大将、総理大臣）、鈴木貫太郎（海軍次官、のち総理大臣）

また、各界の協賛員は次の方々であった。

土方久元（伯爵）、東久世通敏（伯爵）、秋元興朝（子爵）、花房義質（子爵）、松平乗承（子爵）、小澤武雄（男爵）、大倉喜八郎（男爵）、波多野敬直（男爵）、大森鐘一（男爵）、和田垣謙三（法学博士）、気賀勘重（法学博士）、花井卓三（弁護士）、中邨元嘉（判事）、股野琢（帝室博物館館長）、安藤謙介（横浜市長）、大谷靖（済生会理事長）、甲賀宣政（造幣局技師）、呉文聴（前統計審査官）、富谷鉎太郎（東京控訴院長）、松浦良春（前行政裁判所評定官）、中田敬義（外務省秘書官）、三輪田元道（三輪田学園創設）、三宅雄二郎（雑誌「日本」の創設者、文化勲章）、頭山満（玄洋社社長）、寺尾寿（東京物理学校初代校長）、小柴保人（東京帝大・理学、土木；高橋琢也の義弟）、尼子四郎（芸備医会責任者）、古市公威（東京帝大・土木）、小澤俊夫、高地安三郎、渡辺勝三郎、塚本清治（土木局長）、中川望（衛生局長）、有吉忠一（神奈川県知事）、江木千之（臨時教育調査会の委員、のち文部大臣）、安部幸之助、茂木惣兵衛（相場師）、原富太郎（生糸貿易商）、原嘉道（農商務省勤務、のち司法大臣）、佐々木慎四朗、小田良治（札幌五番館デパート創業者）、広島県人会（水曜会）メンバー：田中文蔵（三井物産社長）、下田次郎、植木豊吉、久留只一、壇上新吉、上野安太郎、箕田長三郎、小鷹狩元凱

これらの協賛員への署名活動は大正5年12月16日まで行なわれたが、医学関係者に対して以外はほぼ高橋琢也一人の手で行なわれていたことは明らかである。

5. 秋虎太郎主幹の辞任と高橋琢也の東京医学専門学校設立に向けた活動（大正5年12月～大正6年3月）

東京医学講習所開設時に秋虎太郎は東京医学講習所主幹となり、東京医学専門学校設立に向けた全体の責任者となった。しかし前述のように大正5年11月半ばに秋虎太郎は経営権以外の役割を高橋琢也に移譲した。秋虎太郎は私財を投げ打って医学専門学校を目指すということであったが、結局大正5年の暮には体調を壊し、その責任をも放棄してしまう。恐らくその時期に東京医学講習所主幹の辞任を持ち出したのであろう。秋虎太郎の訪問に来た学生との談話（12月13日）が「奮闘の半年」[5]に残っているが、それからも推察できる。

「予は元日本医学専門学校学生とは何等の関係なし。若し強いて関係を云わば学校より退学処分を受けたる丸山郁雄氏の父、丸山長四郎氏と友人関係より学生後援者の内へ数えられたる迄なり。東京医学講習所を起したるも之れが為めにして、始め四百余名の学生は日本医専より退学を許可されたれども、差し詰め何等帰すると所なく、全く放浪の身となれり。是れ社会上より看て頗る危険のみならず、学生其者の為めにも不利益なり。仍て学生及保証人諸氏の希望に従い、私立東京医学専門学校の設立に至る迄講習所を設けたり。(私立東京医学校とせしも許可手続煩雑に付講習所とせり) 幸に、医学博士佐藤達次郎氏教務上に多大の便宜を与えられたるを以て、名は講習所たるも実は専門学校以上と評せられつつあり。爾来新校の基礎たる財団法人の組織に付　苦心中、十一月八日首唱人会(五名の設立委員会のこと) に於て首唱者中の先輩にして地位名望ともに高き、高橋琢也氏を総委員長に推戴の議あり。同十四日いよいよ同氏の快諾を得たるを以て、同月十五日之を公表することとせり。之れよりして財団の組織に歩一歩を進めつつあるなり。(中略)

日本には斯の如き偽善家に富むを以て、財団の組織は難事中の難事とせり。是世間一般の評にして既往の事実は蓋し然りしならん。然れども、頃者社会の裏面に多少の変調を生ぜり。貧富両者間の融和策として真個に慈善又は義挙的事業の企画せあるること是れなり。今東京医学専門学校設立の為め、高橋先生として財団の組織に尽力せらるるは、予等の最も感謝する所なると共に、速に其成功を祈り四百有余名の学生を窮地より救い出されんことを偏に希望して已まざる所なり。(十二月十三日病中誌す)」

このように、秋虎太郎は11月上旬には東京医学専門学校設立委員長を高橋琢也に移譲し、さらに12月半ばには学校経営の方も断念してしまったようである。窮地に陥った学生達は高橋琢也に経営の責任者となって東京医学専門学校の設立活動を継続するよう要請に訪れた。しかしながら、高橋琢也はすぐには腰を上げなかった。高橋琢也は学生達が最後まで東京医学専門学校設立をやりとげるかどうかの真意を知りたかったのかも知れない。学生達(当時は中村丈夫が学生団団長) は高橋琢也を三顧の礼ならぬ三度にわたり訪問して懇願した。高橋琢也は再三家族会議を開き、最終的に学校経営を含めて全力で学生達を応援することを承諾した。高橋琢也への要請とその承諾までの経緯は中村丈夫(東京医学専門学校、大正7年卒業) の切々とした高橋琢也追悼文に書かれてある[8]。

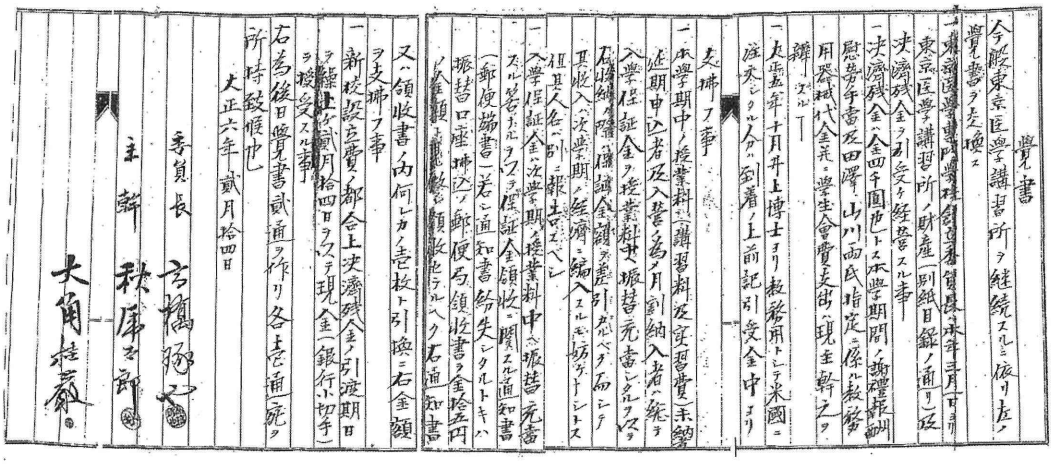
「我等は学業の一日も忽にすべからざるを痛感し、当時順天堂病院院長・佐藤進男爵閣下に請う事幾度之。又、慈父の如く涙を流して同情され医育の方面に対する有らん限りの後援を承諾下され、苦辛半歳の後、諸先生義憤的指導の下に東京医学講習所を設け、学業に就く事を得て、建設の第一段に入り、不肖は推されて建設初代の学生団長の重責を負わされたのでありました。

学修の道は拓けたりとは云え、校舎造築に対して未だ指導の人を得ず、誰人に依頼せんかの点に対しては資本を要する事とて、一時は衆議中々決せず、幾度か諮り謀って遂に全学生の希望は先生の人格に拠るの外道なしと一決し、此大事を懇請する事三回、先生には再三の親族会議を開かれ、中には反対の議もあって再度迄辞退なされしも、我々の熱意は遂に止むなく三回にして初めて決然として起ち、我等の懇請を容れて下さったのでありました。

再三辞退されし点と此点は特にとくに私が強調致し度いのであります。之より先生の粉骨砕身の活動が開始されたでありました。多年愛玩蒐集なされたる骨董品も売捌かれて資に充られて、帝都は申すに及ばず、関東、関西、北日本等各方面の政治家、実業家、宗教家、教育家等万般の諸名士に面接され、後援を求められにしが、先生の至誠なる熱意に依りて残らず賛同され、精神的物的に助勢を約さざれんもの二千に近く、自署は宝物として保存されてあるのであります。

之偏に大行が熱情の権化であり、楓風休雨字其儘の結晶であったのであります。茲に於て敷地は購われ、工事は進められ、光輝ある噫実に我東京医学専門学校が生れたのでありました。先生が関西地方行脚の後、大谷句佛上人が大変同情なされた上に短冊を下されしに対し、自分も感激の余り

伏しおがみふしおがみつつ泣く蛙



覚書

今般東京医学講習所ヲ継続スルニ依リ左ノ覚書ヲ左様ス

一 東京医学講習所ノ財産（別紙目録ノ通リ）及決済残金ヲ引受ケ経営スル事

一 決済残金ハ金四千圓也トス本学期間ノ謝礼報酬慰労手当及田沢、山川両氏指定ニ係ル教務用器械代金並ニ学生会費支出ハ現主幹之ヲ弁ス

一 大正五年十月井上博士ヨリ教務用トシテ米国ニ注文シタル分ハ到着ノ上前記引受金中ヨリ支払フ事

一 本学期中ノ授業料（講習料及実習費）未納者延期申込者及入営ノ為メ月割納入者ハ総テ入学保証金ヲ授業料中ヘ振替充当シタルヲ以テ右収納ノ際ハ保証金額ヲ差引カルベク而シテ其収入ハ次学期ノ経済ニ編入スルモ妨ゲナシトス

但其人名ハ別ニ報告スベシ

一 入学保証金ハ次学期ノ授業料中ヘ振替充当スル筈ナルヲ以テ保証金領収ニ関スル通知書（郵便端書）若シ通知書紛失シタルトキハ振替口座払込ノ郵便局領収書ヲ金拾五円ノ金額ト看做領収セラルベク右通知書又ハ領収書ノ内何レカノ壱枚ト引換ニ右金額ヲ支払フ事

又ハ領収書内何レカ壱枚ト引換ニ右金額ヲ支払フ事

一 新校設立費ノ都合上決済残金ノ引渡期日ヲ繰上ゲ弐月拾四日ヲ以テ現金（銀行小切手）ヲ授受スル事

右為後日覚書弐通ヲ作リ各壱通宛ヲ所持致候也

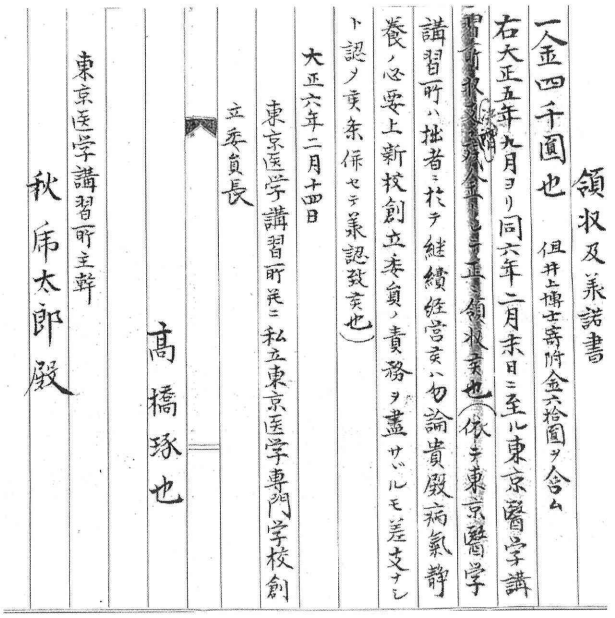
大正六年弐月拾四日

寄負長　高橋琢也

主幹　秋虎太郎

大角桂厳

写真 6　覚書　（高橋琢也、直筆。但し署名は高橋琢也、秋虎太郎、大角桂厳）



領収及承諾書

一金四千圓也　但井上博士寄附金六拾圓ヲ含ム

右大正五年九月ヨリ同六年二月末日ニ至ル東京医学講習所ハ拙者ニ於テ継続経営ス（依テ東京医学養ノ必要上新校創立委員ノ責務ヲ尽サヾルモ差支ナシト認メ承諾致ス也）

大正六年二月十四日

東京医学講習所長ニ私立東京医学専門学校創立委員長

高橋琢也

東京医学講習所主幹

秋虎太郎殿

写真 7　承諾書　（高橋琢也、直筆）

と返句を差上て来たと話されし時の御様子が尚眼前に其儘浮んで居ります。我等当時の救われたる学生一同の心境は当時も今も実に其先生の句の「蛙」で御座います。」

このように、高橋琢也が経営権をも含めて全責任者となって東京医学専門学校設立に向けて動き出した。高橋琢也は自身の経験と人脈を総動員しながら、全身全霊でもって難事業に立ち向かうこととなった。

翌大正 6 年 2 月 14 日に、高橋琢也と秋虎太郎は覚書書と経営者移譲の承諾書（写真 6、写真 7）を交わした。高橋琢也直筆の覚書と承諾書は現在も東京医科大学歴史史料室に残っている。

覚書書

今般東京医学講習所を継続するに依り左の覚書を交換す。

一. 東京医学専門学校創立委員長は本年三月一日より東京医学講習所の財産（別紙目録の通り）及決済残金を引受け経営すること。

一. 決済残金は金四千円也とす。本学期間の謝礼報酬慰労手当及田沢、山川両氏指定に係る教務用器械代金並に学生会費支出は現主幹之を弁ずること。

一. 大正五年十月井上博士より教務用として米国に注文したる分は到着の上前記引受金中より支払う事。

一. 本学期中の授業料（講習料及実習費）未納者延期申込者及入営の為め月割納入者は総て入学保証金を授業料中へ振替充当したるを以て右収納の際は保証金額を差引かるべく。而して其収入は次学期の経済に編入するも妨げなしとす。但其人名は別に報告すべし。

一. 入学保証金は次学期の授業料中へ振替充当する筈なるを以て保証金領収に関する通知書（郵便端書）若し通知書紛失したるときは振替口座払込の郵便局領収書を金拾五円の金額と看做領収せらるべく右通知書又は領収書の内何れかの壱枚と引換に右金額を支払うこと。

一. 進攻設立費の都合上決済残金の引渡期日を繰上げ弐月拾四日を以て現金（銀行小切手）を授受する事。

右為後日覚書弐通を作り各壱通宛を所持

致候也。

大正六年弐月拾四日

委員長　高橋琢也

主幹　秋虎太郎

大角桂厳

領収書及承諾書

一金四千円也　但井上博士寄附金六十円を含む

右大正五年九月より同六年二月末日に至る東京医学講習所収支決済残金として正に領収候也（依て東京医学講習所は拙者に於て継続経営候は勿論貴殿病気静養の必要上新校創立委員の責務を尽さざるも差支なしと認め候条併せて承認致候也）

大正六年二月十四日

東京医学講習所並に私立東京医学専門学校創立委員長

高橋琢也

東京医学講習所主幹

秋虎太郎　殿

話は前後するが長委三美は佐藤達次郎を大正5年12月2日に訪れている。その訪問記[7]よりその当時の行き詰った進行状況が良く分かる。

順天堂病院、佐藤達次郎先生を四谷の新邸に。十二月二日午後一時

「雑誌（「奮闘の半年」[3]のこと）作るのもいいでしょうが、も少し目鼻がついてからにしてはどうです。すでに四ケ月になりますが、何等の出来ばえもなく、文部省、内務省へ出る人からよく注意されるので、甚だ当惑する事があります。勿論、創立者でないから、かまわぬものの、実に困りますね。一体何をして御られることかわかりません。さっぽろびーる[9]で諸君はすでに首を取った様な顔をして御られるので、心ひそかに心配していました。五名士の方で金は出来る。何でもないから、教授とあってそれはすぐですとやったので、今となっては困ります。第一いろいろの先生に対して何を言っていいか言葉のない次第であります。三日前も中央衛生会で各年毎に配布する件と講習所を年限に採用する件の難しいとの話があったそうで、何とぞ一日も早く出来る事を祈ります。一体、秋さんから委員長（= 東京医学専門学校設立委員長）を渡したの、間違いですと思います。秋さんは財産もあるし、決心されたのだから、どこまでも責任を負わせして、しかたなき時は出資させねばならないと思います。認可もすぐはくれませんから、早く支度して準備が必要です。

この際ですから、新平民でも商人でも何でもいいから、大いに金を取らねばなりません。少しづつでも作ってそして半分も出来れば。此度は勢いを得まして、どうでもなりますからね。土地を買ってそれを抵当に入れ、始めより小さいものより始めるというように致したいものです。そして誰某よりの金で解剖室というようにしたら、記念となっていいでしょう。此状態ではどうも学生を入れるのを好まないです。それは何でもない人を許すと同じですからね。賛助員にならぬ人でも心配して尋ねてくれます。是非五人をつついて急いで下さい。さすれば、諸君の為ともなるし、勉強の方はつくす考えであります。で、今申した様の訳で、専門学校どもなった節に写真は出す事といたしましょう。大成を期したいものです。」

下線に示した文章のように、秋虎太郎は大正5年11月に東京医学専門学校設立委員長を高橋琢也に委譲し、さらに12月には東京医学講習所主幹を辞任することを決意していた。しかし、長委三美が佐藤達次郎を訪れた12月2日の時点では、その後任の主幹は決まっていなかった。ここで佐藤達次郎が2年生の長委三美に述べたことは、結局大正6年2月以降高橋琢也に引継がれて行くこととなった。以下、高橋琢也日記（大正6年1月4日～大正6年5月2日）を記載し、大正6年1月4日以降の高橋琢也の活動を示す。

大正六年一月お目出度始　一月四日　駿河台瀧の川、木挽町精養軒へ望む。

村田、牧野、横山、村井、古本、西川、岩田、本多、呉秀三、山田、中川諸氏の署名を受く。長井、小田垣、西村、田中、渋沢、署名を受く。午前九時より内務大臣をはじめ上野伊香保温泉に於て画工諸氏をあつめ寄付画を書かしむ。会費（壱百六円也）。壱百円高島北海に渡す。

「年初に当り、高橋琢也の意気込みが分かる一日である。高島北海の協力による、絵画会の準備が行われている。呉秀三ら11名の人達は会合で集っていたと考えられる。呉秀三は広島県出身であり、これらの人達は広島県

出身者であろうか。」

一月十日　朝六時より中村（丈夫）同道にて横浜行く。安藤（謙介）、大谷（靖）、平沼（専蔵）、左右田（喜一郎）、若尾（璋八）、市役所県庁を訪う。大谷の署名を受け、他は不在（旅費四円也二人）

［高橋琢也は学生団団長の中村丈夫を伴って、横浜に向い、横浜在住の有力者達を訪問した。安藤謙介（前出）、大谷靖（前出）、平沼専蔵（横浜銀行創設者、衆議院議員）、左右田喜一郎（前出）、若尾璋八（東京電燈社長、衆議院議員）、らは横浜在住であった。］

一月十一日　早朝より、田中、佐藤、野沢、小林、松本、池上、小坂、諸画工氏を訪う。（渡謝礼。金百円也。田中穎章）

［田中穎章は有名な画家］

一月十二日　夕四時より芝紅葉館へ望む。大谷伯の署名を受く。股野（琢）より（芝）景年、西鳳の紹介をもらう。

［大谷伯爵：東本願寺大谷家。股野琢は帝室博物館館長であり、美術界への影響力は大であった。芝景年や西鳳は有名な画家。］

一月十三日　午後より上野へ行き、帰り浅野家を訪う。

一月十四日　外室なし。

一月十五日　午後五時より日本橋偕楽園望む。田中、永井、依田、香川、川村、高橋、堤、中村諸氏の署名を受く。

一月十六日　午前中外室なし。入（売、奥山へ佐藤紫煙　揮毫画二枚五十円也）出絹地六疋代払、九十六円也。午後七時より日露協会へ望む。諸氏の紹介状を受く。

一月十七日　午前中外室。高田、荒木、池上を訪ねて署名を受く。阿部伯爵、小林、金子（堅太郎）を訪う。夜に至り中村（丈夫）外一人来る。

一月十九日　午後二時、文部省行く。来人、中濱（東一郎）。

一月二四日　午後四時より日本橋矢倉、福井楼へ望む。山科礼三招かる。医学生来る。

［山科礼三：東京商工会取引所副会頭］

一月二十五日　鈴木半蔵医専の事にて来談す。浅野家より五百円也、寄付申来る。

［広島藩藩主・浅野（長勲）家からの寄附金が高橋琢也の寄付活動の第一号であった。高橋琢也にとって主君からの寄金であり大きな意味があったと考えられる。］

一月二十七日　午前中、堀田（正恒）伯、浅野（長勲）家を訪ね署名を受く。医学生二人。

一月二十八日　終日、在宅。鈴木半蔵来談。画会の準備、又は学校敷地に付協議。

一月二十九日　朝より鈴木商店支店、警視庁、大阪商船支店、宝田石油会社、ラサ嶋燐鉱会社、大嶋、山岡、長崎の署名を受け、其の他橋本（圭三郎）氏より多数の照会を受く。

［鈴木商店支店（我国の大総合商社）。大阪商船支店（大阪商船社長は中橋徳五郎であつた）。宝田石油会社（のち日本石油）の社長は橋本圭三郎、ラサ嶋燐鉱会社の創業者は恒藤規隆であった。この日、橋本圭三郎より関西の企業の紹介を多数受けた。］

一月三十日　朝より陸相（大島健一）、内相（後藤新平）を訪い、山科（礼三）、中沢、服部を訪うて署名を受く。鎌田（栄吉）氏の署名を受く。鈴木半造来談。小切手弐拾枚渡す。医生多久来る。磯村、九鬼（隆輝）を訪う。大角（桂厳）、福本（誠）、寺尾（亨）の委員、三河やに会合す（会費十八円）。来人、医学生二人、大角。

［山科礼三：前出。服部金太郎：服部時計店創業者。鎌田栄吉：慶應義塾塾長、貴族院議員。九鬼隆輝：播州三田（さんた）藩藩主子息で、実業家。神戸の財界の有力者であった。］

二月一日　朝七時より野沢、久米、早川、福澤（桃介）、三島（弥太郎）、佐和を訪う。久米、早川、近藤の署名を受く。（車夫、五十銭弁当）

［福澤桃介：福沢諭吉の女婿、大同電力創業者。三島弥太郎：日銀総裁］

二月二日　午前中外室。内務省、福澤（桃介）、伊東己代治、寺嶋（誠一郎か）の署名を受く。福澤より寄附金承諾を受く。来人、中村（丈夫）。鈴木へ画料、小切手弐拾弐枚渡す。二度分十六枚分小切手渡す。

［伊東己代治：伯爵。寺嶋誠一郎：寺嶋宗則伯爵子息、外務大臣秘書官］

二月三日　午前中、高島、藤田、園田の署名を受く。来人、医学生二人。大谷（靖）、藤田より紹介を得る。

［大谷靖は大蔵省権大書記官、内務大書記官、貴族院議員など歴任。錦鶏間祇候。大正5年

には済生会理事長を務めた。]

四日　朝より小池、仲小路（健）、山内を訪いて署名を受け、川崎八衛門、田中銀之助、安場を訪う。留守。

[仲小路健：農商務大臣。川崎八右衛門：川崎財閥二代目。田中銀之助：東京取引所理事長、田中銀行頭取]

五日　朝より今村、山本悌二郎、山本唯三郎、浅野総一郎を訪うて署名を受け、川崎八衛門の寄付の承諾を受く。田（健次郎）、朝吹（常吉）、野沢、久米、松方（巌）、二亦を訪う。不在。馬越（恭平）を訪う。不在。午後五時、富士見軒に秋（虎太郎）、福本（誠）、大角（桂巌）と会合す。山林局長を訪い、久原（房之助）の紹介を受く。鈴木半蔵来談。

[山本悌二郎：台湾製糖支配人、衆議院議員。山本唯三郎：船成金。浅野総一郎：浅野セメント創始者。田健次郎：衆議院議員。朝吹常吉：三越創始者。馬越恭平：大日本麦酒創始者。山林局長：当時は岡本英太郎。久原房之介：久原財閥創始者、慶應義塾の応援者]

七日　逓信大臣、朝吹（常吉）、逓信省、十五銀行、久米商会、ビール会社、山口太郎、勧業銀行、鈴木支店、内務大臣、内務省、台湾製糖、北海炭鉱を訪う（村井貞之助）、湯河元臣、中川健蔵、松方巌、川嶋純幹、浜田恒之助、土岐嘉平、島田、岡田宗之助、池松時和、笠井真一、貝谷、堀内、坂田、俵孫一、鹿之木、山脇、松田、太田政弘、武智直道

[逓信大臣：田健次郎のこと。朝吹常吉：前出。内務大臣：後藤新平のこと。台湾製糖（山本悌二郎の紹介か）。湯河元臣：逓信次官。中川健蔵：貴族院議員。松方巌：常磐炭鉱出資者。浜田恒之助：富山県、宮城県知事。土岐嘉平：石川県知事のち大阪府知事。池松時和：大阪府知事。俵孫一：宮城県知事。太田政弘：熊本県知事。武智直道：台湾製糖社長]

八日　午前中外室。馬越恭平、久米民之助署名受く（田中銀之助、内務省物産奨励会、松平直之）

[馬越恭平、田中銀之助は前出]

九日　磯部四郎、郷誠之助、田中銀之助署名、承諾を受く。渡辺みつるを招く。金子を訪う。

[磯部四郎、郷誠之助：前出。田中銀之助：前出]

十日　山下亀三郎、山田朔の署名を受く。奥平、医専講習所を訪い、講義をなす。鈴木半蔵来談。

[山下亀三郎：山下汽船（のち商船三井）創始者、いわゆる三大船成金の一人。]

十一日　紀元節にて終日外出せず。

十二日　朝より、高岡直亮、清浦伯の署名を受く。浅野家より金五百円也。寄附金受取。

十三日　朝早くより、内務省を訪い、各府県知事の署名を受く。参十名。来人、医学生三人。本田。

[高橋琢也は大正2年より3年まで、沖縄県知事であった。この日内務省で会合があった各県の県知事30名より署名をもらった。]

十四日　午前十時、医学講習所へ秋氏より金四千円也受けつぐ。夕より中央亭へ東洋協会。鈴木半蔵来談。画工招待諸入費及手当百八十円也、小切手を渡す。

十五日　午前中、加藤（友三郎）、菊池（大麓）、武井（守正）の三氏を訪う。

[加藤友三郎、武居守正は前出。]

十六日　午前、午後、夕とも三度出入、来人。徳元、道具屋、金沢、辺見、医学生。朝より中橋（徳五郎）、嶋田、金沢、浅田、三嶋（弥太郎）、安田。朝鮮銀行、東海銀行、菊池を訪い、金沢、浅田、三嶋（弥太郎）、安田の署名を受く。

十七日　文部省、内務省、ラサ嶋会社、明治製糖会社、久原（房之助）を訪う。午後二時土用会へ行く。恒藤（規隆）、相馬、曽我、二条の署名を受く。来人なし。

十八日　根津嘉一郎、藤田平太郎、署名を受く。林権介。

[根津嘉一郎：根津コンツェルン総帥、東武グループ社長、衆議院議員。藤田平太郎：藤田銀行創設。冨士生命保険社長。林権介：駐中公使のち枢密院顧問官]

十九日　園田実徳、勧業銀行、長崎〈省吾〉内務大臣を訪う。鈴木半蔵来談。

[園田実徳：北海道炭鉱鉄道発起人、北海道銀行社長、衆議院議員。勧業銀行：副頭取は柳谷卯三郎であった。長崎省吾：宮内大臣。]

二十日　午前、大埜、吉田、井上（角五郎か）、金子（堅太郎）、小田。午後より大谷、野口小ひんの増上寺葬式望。内務大臣邸吉田の署名を受く。

二十二日　田健次郎、下坂の署名を受け、朝鮮銀行、三井（合名会社）、団（琢磨）、他田面会。来人、鈴木（半蔵）、竹下（隆文）、会沢、佐藤先生話しの件（五十円二枚、鈴木使い渡）

二十三日　渋沢（栄一）。午後より園田葬式。青山斎場。来人、鈴木（半蔵）、竹下（隆文）。

二十四日　中村、斉藤、金子（堅太郎）、画家松林（桂月）、佐久間、寺嶋、小牧、末述。中村、斉藤。末述。金子（堅太郎）の署名を受く。内務省。

二十五日　日曜日にて終日在宅。来人、佐藤（達次郎）博士。鈴木半蔵。

二十六日　三輪田学校。（川合）玉堂、石黒（忠悳）、藤井、月耕、若宮（正音）、松平（乗承）伯、林権介、下田歌子を訪う。下田、月耕の署名を受く。（絹代、半沢払渡、五百参拾七円）。鈴木来談。

［三輪田学校：校長は三輪田元道。川合玉堂：高名な日本画家。下田歌子：教育家、歌人、実践女子学院創設。若宮正音、松平乗承、林権介は前出］

二十七日　川合玉堂、尚家、酒井忠道を訪う。鈴木半蔵来談。講習所より書記来る。

［酒井忠道：貴族院議員、伯爵］

二十八日　午前十時、物理学校へ医学講習所全部、秋氏より引継ぎ受ける。鈴木半蔵、竹下、肥田英人使用す。福本氏立会の上、夕より一日会へ望む。二人署名を受く。

三月二日　夕七時、京都方面へ出立。中嶋、戸田、東京清楼、柳原。京都にて大谷、田中、升内、田附、都路、深見、上村、山本、江崎、矢野、井上、上井、坂、平賀、永田、菊地、山本、岩井、小寺署名受く。木内、大沢、会尾、稲垣、田中、奥、繁多、大家、伊藤、広海、山口、武尾、久原、久保田、礒野、山田、高倉、神戸松尾、清野、大久保を訪う。尼ヶ崎十三日朝八時半着。夕七時出立、十八日夜帰京。

［高橋琢也は満を侍して関西に向った。上記の方々は関西各界の有力者であると考えられる。とくに大谷とは大谷句仏上人のことか。］

十九日　午前中、阪東、医専講習所へ望み演説なす。

二十一日　鈴木半蔵、鈴木久作、学校地所及校舎の事にて会合す。夜に至り、中村（丈夫）外一名来る。

二十二日　鈴木半蔵、竹下（隆文）、講習所の事にて会合す。

二十三日　藤山雷太、磯村豊太郎、田坂初太郎、署名を受け、森村（開作）、小野、奥平を訪う。

［藤山雷太：大日本精糖社長、東京商業会議所会長。磯村豊太郎：三井物産より北海道炭鉱汽船社長。田坂初太郎：品川銀行頭取。森村開作：商社・森村組社長。］

二十四日　上村、福島の署名を受け、野田、九鬼（隆輝）、村井（吉兵衛）、芝（景川）、近藤を訪い、講習所に行く。午後二時より北海道協会、富士見軒へ会す。

二十六日　松平伯の署名を受け、南部（光臣）伯、上杉伯、古市（公威）氏を訪う。

午後帰り、夕上野行。

二十七日　原保太郎署名を受け、伊東（己代治）、金子（堅太郎）、益田を訪う。夜に至り、医生三人来る。

［原保太郎、伊東己代治、金子堅太郎は前出］

二十八日　竹内綱、尾崎三郎、中野欽九郎、美濃部（達吉）の署名を受け、脇田、志賀、中田、井上、正金銀行、栄銀行、外一名を訪う。

［竹内綱：衆議院議員、吉田茂の父。尾崎三郎：衆議院議員。美濃部達吉：貴族院議員］

二十九日　井上準之助の署名を受け、志賀、池田、相良、徳川（家達）伯、有賀（長文）を訪い、本部に行く。

［井上準之助：第十代日銀総裁、大蔵大臣。徳川家達：前出。有賀長文：前出］

三十日　秋田勇、田中長兵衛の署名を受け、森村銀行を訪う。夕、大久保倶楽部へ前田米蔵応援に行く。

［森村銀行：森村組の中枢］

三十一日

四月一日　十一時より川崎銀行、渡辺直達の署名を受け、夕一日会望む。

二日　田辺勉吉、山県（有朋）公、寺崎、藤井、佐々木、徳川（家達）候を訪う。豊川良平、安部浩の署名を受く。（四月二十三日、浅野殿園遊会、名古屋市におもむく。二十八日帰宅なす）

［田辺勉吉：久原鉱業取締役。豊川良平：三菱財閥幹部、第百十九銀行頭取］

五月二日　午前より、安田、田中四郎左衛門訪問。

十一日　午前中、品川、大倉（喜八郎）、伊藤、陸軍大臣、徳川（家達）、池田、川上、小川、志賀、

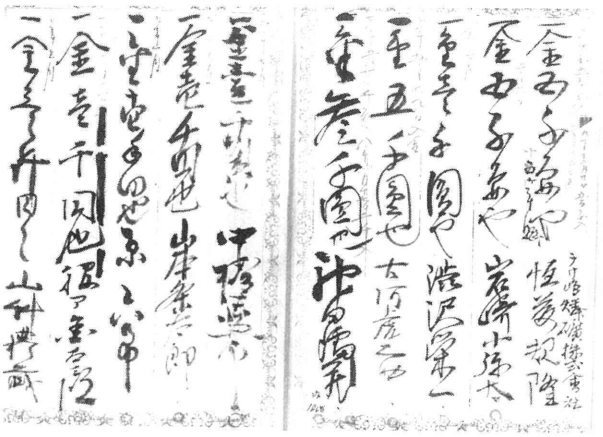


写真8　大正6年の寄付名簿より（右より恒藤規隆、岩崎小弥太、渋沢栄一、古河虎之助、神田鐳蔵、中橋徳五郎、山本条太郎、原六郎、橋本圭太郎、山科礼蔵）

相良を訪う。夕、上野へ。

［田中四郎左衛門：絹布問屋老舗店主。陸軍大臣：大島健一］

十二日　田中四郎左衛門。○美術倶楽部行き。

高橋琢也は2月16日に秋虎太郎より東京医学講習所主幹を引き継いだのち、東京医学専門学校設立に向けて文部省の交渉と設立資金獲得のために身を粉にして動くこととなった。2年以上にもわたる募金活動のほとんどは関西地方で行なわれた。なぜなら、この当時、関西は第一次大戦の末期やその後の海運、造船、鉄鋼、繊維、金融のブームで経済は好況であり、いわゆる成金が続出していたからである。東京は政治の中心であったものの、本社や工場など産業・実業界の主要な部分はほとんど関西にあった。それ故、高橋琢也は有力な紹介者の支持を得て、関西に向かったのである。高橋琢也の関西での精力的な募金活動の状況は東京医大五十年史[9]に記載されている大正6年の寄付者名簿から伺われる［写真8および以下の名簿（括弧内に役職を附した）］。高橋琢也はこれらの方々を一人一人訪問して寄附を依頼したのである。

東京医学専門学校創立寄付者名簿（大正六年）

一万五百円　野口遵（のぐち・したがう）（旭化成創業者）　六千円　神田鐳蔵（かんだ・らいぞう）（神田銀行創業者）　五千五百円　恒藤規隆（つねふじ・のりたか）（ラサ工業創業者）、ラサ島会社（現・ラサ工業）　五千三百円　松本清助（広島電気創業者）　五千円　岩崎小弥太（三菱合資会社社長）、古河虎之助（古河鉱業社長）　二千五百円　河内研太郎（海運会社社長、神戸）　二千百円　松原　　二千円　近藤廉平（日本郵船社長）、勝田銀次郎（勝田汽船海社長、青山学院出資者、神戸市長）、北海道拓殖会社・永田　　千八百円　矢野慶太郎（大阪住宅経営取締役）　千五百円　堀啓太郎（大阪商船社長）、山岡順太郎（大阪商船重役）　千三十四円五十銭　川野英之　　千六十二円　有吉忠一（宮崎県知事、関東大震災後・横浜市長）　千円　渋沢栄一（初代日銀総裁）山本条太郎（満鉄総裁）、原六郎（銀行家）、服部金太郎（服部時計店創業者）、山科礼蔵（東京商業会議所副会頭）、嶌徳三（大阪株式取引所理事長）、多羅尾源三郎（大阪海上保険専務）、田中市蔵（大阪・攝陽銀行重役）、八馬兼介（西宮銀行頭取）、野村徳七（野村證券創業者）、小池国三（小池銀行創立者）、中橋徳五郎（大阪商船社長、文部大臣）、犬上慶五郎（函館船渠社長）、岡崎藤吉（岡崎汽船・神戸岡崎銀行創始者）、森平蔵（森平気船創業者）、川崎芳太郎（川崎造船所社長）、永田三十郎（藤永田造船所社主）、範多竜太郎（大阪鉄工所社長）、岩井勝次郎（商社・岩井商店創業者）、安宅弥吉（安宅産業創業者）、鈴木岩次郎（総合商社鈴木商店）森村開作（森村グループ社長）小寺成蔵（日本絹毛紡績取締役）、伊藤伝七（三重紡績社長）、喜多又蔵（日本綿花社長）、南郷三郎（日本綿花重役、甲南ゴルフ倶楽部創業）、阿部彦太郎（内外綿創始者）、川西清兵衛（日本毛糸創業者）、武藤山治（鐘紡社長）、新田長次郎（新田帯革製造所創業者）和田豊治（富士紡績社長）早川千吉郎（三井合名会社副理事長）、麻生太吉（福岡・炭鉱経営者）、蔵内次郎作（福岡・炭鉱経営者）、小曾根喜一郎（阪神電鉄創業者）、嶌定次郎（京阪電鉄発起人）、藤原銀次郎（王子製紙社長）、大村彦太郎（白木屋デパート創業者）、小田良治（札幌五番館デパート創業者）田村市郎（日本水産創業者）、辰馬吉右衛門（酒造会社社主）、松浦泰次郎（広島実業家）、王子製紙、村井吉兵衛（民営タバコ会社社長）、西野嘉右衛門（酒造・藍製造・西野商店店主）、渡辺郡朗、成瀬仁蔵（日本女子大学創始者）、外山捨造、高橋隆一

九百円　石塚英蔵（第十三代台湾総督）　八百円　津村祀陵　六百一円七九銭　行友（劇作家）　六百円　三嶋弥太郎（日銀総裁）、大隈重信（総理大臣）　五百円　浅野公爵家（広島藩藩主）、土居剛吉郎（宇和島藩主子息）、原敬（総理大臣）、山本達雄（日銀総裁）、後藤新平（満鉄総裁、東京市長）、高橋光威

（原内閣書記官長）、志村源太郎（産業組合中央会会頭）、荒井泰治（台湾貯蓄銀行創立者、塩水港精糖社長）、岩田惣三郎（大阪、相場師）石井定七（大阪・大相場師）黒川福三郎（大株取引員組合委員長）、藤田謙一（日本工会議所会長）、静藤次郎（静藤次郎商店社主、神戸）、湯浅竹之助（湯浅商事創始者、神戸）伊藤忠合名会社、山地土佐太郎（実業家・スマトラゴム栽培）、呉錦堂（神戸・華商）、伊藤万助（大阪・商社社長）、高津久右衛門（高津商事社長、大阪糖業組合幹事）、竹原友三郎（竹原友三郎商店店主、大相場師）、朝吹常吉（三越社長）、森恪（三井物産天津支店長のち衆議院議員）、山本藤助（千歳造船所設立者、帝塚山学院理事長）、久保田権四郎（久保田鉄工所創設者、広島）、中川浅之助（大阪商船内航部長）、千浦友七郎（大阪商船監督課長）浜口駒次郎（浜口汽船創業者）、四本万二（神戸・国際汽船取締役）、穴水要七（富士製紙専務）、高田釜吉（高田商会二代目社長）、大川平三郎（富士製紙樺太工業社長）、菊地恭三（紡績連合会委員長）、馬場義興（日本綿花取締役）、中西平兵衛（製綿業、神戸）、菊地吉蔵（日本人絹染色連合会社社長）、八木興三郎（鐘紡大株主）、田附政治郎（日清紡創立者、相場師）、阿部市太郎（滋賀・金巾製織創業者）、馬越恭平（大日本麦酒創業者）、植村澄三郎（大日本麦酒取締役）、嘉納治兵衛（白鶴酒造社長、神戸）、山本悌次郎（台湾製糖創立者、農商務大臣）中山説太郎（日魯漁業重役）、村井貞之助（京阪電気鉄道取締役）、泉吉次郎（近畿日本鉄道副社長）、伊藤長次郎（山陽電鉄創始者、商社神栄創始者）、山陽合名会社、亀岡豊二（篤志家）、原田六郎（大阪富豪・大阪商船学校寄付）、林蝶子（大阪実業家、大阪外語大出資者）、杉村正太郎（大阪・杉村倉庫創業者）、滝川弁三（東洋燐寸創業者、神戸商工会議所会頭）、橋本圭三郎（日本石油会長）、水越理斎、阿部信次、石井竹三、山本博一、中嶋保之助、岡見裕吉、芝川栄蔵、清水玄達、不破栄次郎、田中省三、棚橋琢之助、山田穆、加副力三郎、崎村教平、高橋隆晴、峰村　四百五十円　小寺謙吉（神戸市長、三田学園創立者）

三百円　堀田正恒（佐倉藩主子息、伯爵）、蜂須賀侯爵家（阿波藩主子息）、望月圭介（逓信大臣、広島）、田中平八（田中銀行設立者、東京株式取引所設立）、無名氏、小野金六（富士身延鉄道創立者）、田中銀之助（田中銀行頭取、日本製鋼所役員、日本ラグビーフットボール協会初代会長）、郷誠之助（日本運輸社長、東京株式取引所理事長）、藤山雷太（大日本精糖社長）、白石直治（関西鉄道会社社長）、橋本信次郎（明治乳業取締役）、田中栄八郎（関東酸曹取締役、東洋硝子重役）、村木正憲（大阪機械工作所社長）、上田弥兵衛（積善銀行取締役、京都）、瀬尾喜次郎（木綿商、大阪）、大家七平（大家商船社主、石川）、竹尾治右衛門（日本紡績社長、大阪）、加嶋安治郎（城南土地重役、大阪）、竹村清次郎（日本紡績監査役）、岸本吉右衛門（岸本製鋼所創業者、日本鋼管設立、大阪）、井上重造（日本燐寸、大阪）、矢野荘三郎（大瀬鉱山設立者）、伊藤長蔵（ナカバヤシ創業支援者、神戸）、芝田大吉（相場師、大阪）、石川茂兵衛（神戸・肥料問屋店主、中島飛行機創立支援者）、阿部房次郎（紡績会社社長、大阪）、辰馬悦蔵（白鷹酒造社長）、谷口竹郎、海塚新八（東洋工業社長）、福沢桃介（大同電力創業者、福沢諭吉女婿）、浜本義顕（大日本精糖取締役）、秦豊助（犬養内閣・拓務大臣）、柿原蔵、和田豊、野村半三郎

二百五十円　森下博（森下仁丹創業者、福山）、津田資郎（神戸海運集会所発起人）、戸田実（日高紡績創始者、戸田銀行創始者、和歌山）、平田篤次郎（富士フィルム創業者）、児玉一造（豊田通商創業者）

二百四十三円五十銭　河合二百円　九鬼隆輝（旧三田藩藩主、子爵）、小笠原長幹（小倉藩主子息・伯爵）、井上角五郎（日本製鋼創業者）、若尾璋八（東京電灯社長）、白石元次郎（日本鋼管創業者）、平生釟三郎（川崎重工設立者、甲南大学設立）、土方久徵（日銀総裁、三重）広岡恵三（加島銀行頭取、大同生命社長）、小川平助（大阪証券取引所役員）、三木興吉郎（徳島・三木産業創始者）、美濃部俊吉（東洋冷蔵社長）、根津嘉一郎（東武鉄道社長）、柳谷卯三郎（日本勧業銀行副総裁）、楢崎平太郎（ナラサキ産業創始者、室蘭）、藤田好三郎（王子製紙専務）、和合英太郎（ニチレイ創業者）、平野平兵衛（大日本紡績取締役、大阪）、市川誠次（日本窒素肥料副社長、大阪）、前野亀之助、田口謙吉（参天製薬創業者）、塩野儀三郎（シオノギ製薬創業者）、森平兵衛（丹平製薬創始者）、松尾小三郎（関東都督府海務局長）、戸田栄蔵（播州鉄道重役、神戸）、下村耕次郎（大阪鉄工所専務、日本ロータリークラブ設立）、川崎助太郎（紡績業者、神戸）、森本合名会社（酒造会社、三重）、野瀬七郎平（商社兼松創始者）、浜崎健吉（浜崎健吉商店社長、京京阪電鉄監査役）、藤本清兵衛（藤

本ビルブローカー銀行創設者、大阪)、木下武兵衛(大阪木下武兵衛商店社長)、生嶋五郎兵衛（神戸、大地主)、杉山四五郎（高知県知事満州関東庁事務総長)、和田久左男、山田喝朔、矢辺清兵衛、平田初熊、中嶋一治、高橋長俊、植松保策、万月堂（印刷会社)、沼津町

一万円は現在の数千万円から一億円に相当すると考えられる。最初に募金を寄せたのは高橋琢也が青年時代に仕えた広島藩藩主・浅野長勲（あさの・ながこと）であった。高橋琢也は浅野長勲とともに長州征伐に参加し、広島藩重鎮であった船越衛に庇護され、江戸開成学校で学び、終世、浅野家や船越家と関係を強くもった。また、佐倉順天堂当主佐藤進の主君と佐倉藩主子息堀田正恒らも多額の寄付を寄せた。

高橋琢也は農商務省山林局出身の官僚であり、実業界での活躍は同省を非職となる明治30年以降であったが、活動の一部は北海道における山林事業関係であった。しかしながら、そこで明治、大正時代の実業界の雄であった井上角五郎と知りあった。井上は北海道炭鉱鉄道、新日本製鉄室蘭製鉄所、日本製鋼所、名古屋火力発電所、千代田生命保険相互の設立など数多くの会社の設立に関わるとともに、京都電気鉄道社長、日本ペイント会長、日本瓦斯取締役など歴任した。井上は東京医学講習所の設立前後より東京医学専門学校認可まで多大な支援をした。大正6年当時、井上角五郎は実業界のトップとして高橋琢也に関西財界の有力者達への紹介状を書いのでないかと推測される。

高橋琢也は中橋徳五郎と親しい間柄であった。中橋徳五郎は加賀国金沢（現在の金沢市）に生れ、明治19年(1886年)に東京帝国大学法学部を卒業した。卒業後、判事試補となり、さらに明治20年には農商務省に移籍し参事官となった。この頃、高橋琢也は農商務省山林局に在籍しており、それ以来の知己となった。明治30年に高橋琢也が非職となったのち、居を早稲田鶴巻町より麹町区に変えたが、中橋徳五郎とは近所となり、前にもまして懇意の間柄となった。中橋徳五郎は東京医学講習所設立には協賛員としても参加したが、設立資金獲得のために多大な応援を行なった。中橋徳五郎は明治31年(1898年)に岳父の大阪商船（のち商船三井）社長の田中市兵衛（関西財界重鎮）に依頼されて、同社社長に就任して以来18年にも亘り会社の拡大に努めた。大正3年（1914年）に辞任。一方、政治家としては明治34年に大阪市会議員となり、議長も務め、さらに大阪から衆議院議員として出馬し、当選6回を数えた。大正7年原内閣組閣に伴い、文部大臣となり、東京医学専門学校の医師無試験資格の獲得には尽力した。このように、大阪財界における有力者であった中橋徳五郎が大阪商船を始め、日本郵船、勝田汽船などを含む商船会社、関西の商社各社、造船会社各社、紡績会社各社の責任者に紹介状を書いた可能性が高い。中橋徳五郎は日清汽船の創立を渋沢栄一と行なっており、渋沢栄一とも親しい間柄であった。

高額寄付者の恒藤規隆はもともと東京帝国大学農学部出身の学者（我国最初の農学博士）であるが、ラサ島（沖大東島、沖縄県）においてリン鉱山を発見し、ここを中心にラサ島会社（現・ラサ工業）を設立し、多大な利益を得た。高橋琢也は沖縄県知事時代に恒藤規隆と知りあい、さらに雑誌「国論」（大正4年発行）にラサ会社の紹介を特集として一冊にまとめているが、その時の縁があったのでないかと推測される。

神田鐳蔵は神田銀行創設者であり、我が国証券界（東京取引所）の鬼才であるといわれているが、高額寄付をした。神田鐳蔵への紹介は田中銀之助（東京商工会理事長)、郷誠之助（東京取引所理事長)、大野伝兵衛（大野銀行創設者、のち順天堂病院事務長)、渋沢栄一（初代日銀総裁）らかも知れない。日銀関係の高額寄附者が多いのは渋沢栄一の尽力によるものであろうか。

野口遵は旭化成創業者であり、本来の会社の活動は大阪を足場としていたが広島市に移住した。石川県金沢市出身であり、中橋徳五郎と同郷であったことから、中橋の紹介があったかもしれない。松本清助（広島電気社長）は高橋琢也の同郷の広島出身であった。

大隈重信は藩閥政治を排除するため、長州藩出身の重鎮、品川弥次郎や井上馨らの庇護を受けていた高橋琢也を明治三十年に非職にしたことがある。しかしながら、大隈重信が寄付名簿に入ったのは、佐藤進が大隈の命の恩人であったことや、早稲田大学第二代総長・高田早苗（大正5年5月当時は文部大臣）の要請などが考えられる。また慶應義塾大学塾長・鎌田栄吉や医学部設立者の北里柴三郎、福澤諭吉の女婿の福澤桃助や久原房之助(久原財閥創設者、慶応義塾応援者）からの寄付も特記すべきことであ

ろう。

高橋琢也は大正 6 年初めより関西において募金活動を開始したが、その年の秋に竹下文隆（高橋琢也の女婿）に手紙を送っている。

「御来書に依れば来阪せらるる極なるか。来月は成度早く帰京の心算なれば、大概の事は可状免闘上居なし度。金円の入用なれば、別に申越るれば、送金可致。強いて下阪にも及ばざるべし。小生も帰心如矢。然も折角温めたる玉子が中途に冷却すれば孵化せざる内に腐敗して、零になる恐れあり。

是迄の協賛を今や具体化せしむる最中にて、此処最も大切の場合なり。可之、目下阪神間に攻入たる敵は慶應医科同仁会、水難救済、飛行機、嘉納体育、西高女、朝鮮薬学、東京貧民学、其他二三の寄付募集戦あり、一方府立医大、水害救済、貧民救済の自衛線あり。其戦場に単騎突入したる予の一騎打は如何に悪戦苦闘しつつあるか。其真相を知る人は蓋し稀れなからんか。此際一歩退けば敗燼なり。所謂争覇戦争然。茲比較的勝利を得つつある心算なり。大概今後二週間にして勝敗を決すべしと信ず。願くば、凱歌を奏して学生等を歓喜せしめんと夫のみ楽み居候。　　夜中乱筆

十月十五日

五木

文隆様　　」

五木（山人）とは高橋琢也の雅号である（高橋琢也は別に「天地有情」の雅号をもち、渾名は「子玉」であった）。この手紙のように、高橋琢也の関西における寄付金の募集活動は困難を極めた。とくに、競走相手として、慶応義塾大学医学科設立による寄附金集めと重なった。また京都府立医科大学や水害基金など、幾多の寄附金募集活動とも競合した。その中で高橋琢也は孤軍奮闘して活動を続けた。学生達はこのような高橋琢也の悪戦苦闘については、当時はほとんど知ることはなかった。しかし、高橋琢也は餌を待つ雛鳥のために飛び回る親鳥の如く、四百数十名の学生達の喜ぶ姿を心の支えとして募金活動を続けた（以下次稿に続く）。

文　　献

1）順天堂大学：順天堂史　1980 年刊
2）友田燁夫：高橋琢也と学生達（2）東京医科大学雑誌 **68**：26-44, 2010
3）東京医学専門学校学生団：本部会記録（復刻版）1971 年
4）天野郁夫：大学の誕生　中公新書（上）（下）2004 年
5）東京医学大学同窓会：奮闘の半年（復刻版）1996 年
6）高橋琢也：高橋琢也日記（大正 5 年～昭和 3 年）
7）長委三美：東医の礎（東京医科大学開学の礎）東京医科大学刊、2008 年
8）中村丈夫：我等慈父を追慕して。東京医学専門学校雑誌（高橋琢也追悼号）58-60, 1935
9）東京医科大学同窓会：東京医科大学五十年史 1971 年